The Toyota Foundation 2002 Annual Report

トヨタ財団
2002年度年次報告

平成14年度

注記

◎この年次報告書は、2003年6月3日の第102回理事会において承認された「平成14(2002)年度事業報告書」に基づき、当財団の2002年度(2002年4月1日～2003年3月31日)の事業内容をとりまとめたものです。

◎本報告書中の助成対象一覧はいずれも助成決定時のものであり、決定以降の変更は割愛いたしました。ただし、これまでの助成対象について助成金額の変更があったものについては、会計報告欄にそれを記載いたしました。

目次

4 理事・監事
5 評議員

6 三つの光が射し込む——「新たな幸せづくり」を目指して **木村尚三郎**
8 明日のためにまず足元を固める **蟹江宣雄**

11 **I 研究助成プログラム**
12 I-0｜研究助成プログラムの概要と活動結果
21 I-1｜研究助成A［個人研究］
25 I-2｜研究助成B［共同研究］
28 I-3｜研究助成特定課題——近代化とくらしの再発見

33 **II 市民社会プログラム**
34 II-0｜市民社会プログラムの概要と活動結果
35 II-1｜市民活動助成
39 II-2｜市民社会プロジェクト助成

41 **III 東南アジアプログラム**
42 III-0｜東南アジアプログラムの概要と活動結果
46 III-1｜東南アジア国別助成プログラム(SEANRP)
60 III-2｜東南アジア研究地域交流プログラム(SEASREP)
63 III-3｜研究能力向上プログラム(RSTP)
64 III-4｜「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成

71 **IV その他の助成**
72 IV-0｜その他の助成の概要
73 IV-1｜計画助成
75 IV-2｜成果発表助成

77 **V 事業実績の概要**
78 V-0｜事業実績の概要
80 V-1｜2002(平成14)年度会計報告
84 V-2｜2002(平成14)年度事業日誌

理事・監事

2003年3月31日現在（理事・監事は五十音順・敬称略）

会長	豊田達郎	トヨタ自動車株式会社相談役
理事長	木村尚三郎	東京大学名誉教授
常務理事	蟹江宣雄	
理事	天城 勲	文部科学省顧問
	飯田経夫	中部大学教授
	石井米雄	神田外語大学学長，京都大学名誉教授
	岩崎正視	トヨタ自動車株式会社顧問
	末松謙一	株式会社三井住友銀行名誉顧問
	立川 涼	愛媛大学名誉教授
	豊田章一郎	トヨタ自動車株式会社取締役名誉会長
	星野昌子	特定非営利活動法人日本NPOセンター代表理事
	松本 清	トヨタ自動車株式会社顧問
	八城政基	株式会社新生銀行代表取締役社長
	山口日出夫	前 財団法人助成財団センター専務理事
	吉川弘之	独立行政法人産業技術総合研究所理事長， 日本学術振興会会長
監事	田島和憲	中央青山監査法人代表社員・名古屋事務所長， 公認会計士
	松方 康	三井住友海上火災保険株式会社相談役

評議員

2003年3月31日現在(五十音順・敬称略)

飯島宗一	名古屋大学・広島大学名誉教授
石澤良昭	上智大学外国語学部教授
大賀典雄	ソニー株式会社名誉会長
大木島 巌	トヨタ自動車株式会社顧問
奥田 碩	トヨタ自動車株式会社取締役会長
熊谷直彦	三井物産株式会社相談役
佐々木紫郎	トヨタ自動車株式会社顧問
張 富士夫	トヨタ自動車株式会社取締役社長
豊田英二	トヨタ自動車株式会社最高顧問
中村桂子	JT生命誌研究館館長
永澤 満	豊田工業大学学長
那須 翔	東京電力株式会社顧問
林 雄二郎	財団法人未来工学研究所副理事長
藤井宏昭	国際交流基金理事長
本明 寛	早稲田大学名誉教授
山本幸助	トヨタ自動車株式会社相談役
和田明広	トヨタ自動車株式会社顧問

三つの光が射し込む

「新たな幸せづくり」を目指して

トヨタ財団 理事長
木村尚三郎

総体として大きな力を保持しながらも、ジェット機全体が乱気流のなかにあって、出口が見つからないようなのが、現代日本の姿である。国際的テロ事件や地域紛争、宗教対立や民族対立、そしてアメリカによるイラク戦争、増加する凶悪犯罪や少年・子どもの非行、企業・病院などのモラルの低下・弛緩、多発するミスなどに、機体がはげしく揺さぶられたまま、なかなか真っ青な上空に脱出できない。将来への明るさは感じられるものの、どこから光が射し込みだしているのかも定かではない。

その光の方向を見定め、姿勢を正し、体勢を立て直す。それは今日の日本にとってと同時に、2004年10月に30周年を迎える、トヨタ財団にとっても大切なことである。

光の一つは、明らかに国際情勢の大きな変化から発している。戦争をきっかけとしてイラクに活動拠点の楔を打ち込もうとするアメリカと、それに激しく抵抗するヨーロッパ諸国のせめぎ合いにも見られるように、「アジア・太平洋」の時代から「ユーラシアの時代」への、新たな推移がうかがえる。東南アジアへの支援に、重点活動の一つを置いてきたトヨタ財団としては、より真剣にその意味を考えねばならない。

東南アジアないしユーラシアについては、どうしても大国としての中国の存在と、2004年5月に現在の15カ国から、ロシアの手前までの25カ国に拡大予定のEU(ヨーロッパ連合)の動きを、考察の視野に入れる必要があろう。広大な中国が、歴史上何度か分裂の危機にさらされながらも、つねに一国としてのまとまりの方向に力が働いてきたのは、まさに中華思想の故に他ならない。世界最上等の中国文化への確信を中国人すべてが共有しているからであり、それはフランス料理三千種に対する中華料理一万種にも、よく表わされている。

すなわち第二の光は、「文化」から発せられている。歴史と伝統に培われた、土の匂いのする、土地ごとのいい生き方、生きる知恵、すなわち文化は、ヨーロッパでもフランスを中心に豊かな内容があり、外交・経済・観光・デザイン・食文化その他に発揮され、軍事大国アメリカに対抗する有力な武器となっている。フランスが7600万人と、国民の数5800万人を超える世界一の外国人観光客を引き寄せる「魅力」は、その文化にある。

「カネと技術」の優劣がすべてだった20世紀が去り、技術文明の成熟が大勢においてみてとれる今日、国や地域、企業や製品、個人にとって、「魅力」の有無、「花」(色気)があるか否かが、これからの成否の岐れ目となる。わが国の製造技術の優秀性、完成度の高さは、江戸時代からの職人のきめの細かさ、抜群の仕上げ能力にもとづいており、それ自体、日本文化の反映であるといっていい。それは、日本農業における園芸的なきめの細かさと対応している。

その意味で、トヨタ財団「研究助成」における特定課題「近代化とくらしの再発見」には、大きな期待がかけられている。幕末の日本にやってきたペルリ提督は『シナ海および日本航海記』において、日本の職人技術の高さが世界のどこと比べても劣らぬものであり、欧米の工業文明を手に入れた暁には、強力な競争相手になることを適確に予言している。

トロイア遺跡の発掘で知られるハインリッヒ・シュリーマンも、幕末日本を訪れて、仕掛けで動く亀や百種類以上もある独楽などの玩具に驚嘆し、その製造技術の高さには、「ニュルンベルクやパリの玩具製造業者はとても太刀うちできない」と述べている(石井和子訳『シュリーマン旅行記　清国・日本』、講談社学術文庫)。

豊田佐吉には、農業とともに大工仕事の経験があった。そこから、同じく木製の機械としての織機になじんだのであろうとされる(『トヨタ財団10年の歩み』8-9ページ)。わが国のピアノ製造は、時計職人の山葉寅楠と飾り職人の河合小市によって本格的に始まっている(日本楽器)。わが国における技術開発の原点をふり返る近代化研究は、産業考古学の一環としても重要であるが、今後の新たな発想、新しい技術の可能性を探り、日本文化を再発見する上でも大きな意味を持っている。

第三の光は、「共助」運動から射し込んでいる。今や日本のNPO法人も、1万2000を数えるにいたった。それはもともと、人様に御奉仕して自分も幸せを得るという、四国八十八カ所遍路に対する地元の「お接待」に通じる発想であり、財団の「市民社会プログラム」に具体化されている。

百年ぶりに訪れた歴史的転換期にあって、国や地域、企業などが即応しきれない新たな悩み、生きる不安に奉仕し、「新しい幸せづくり」に貢献する。これこそトヨタ財団設立の背景にあるものであり、そのことは『トヨタ財団10年の歩み』の巻頭に、「人間のより一層の幸せを目指し」として明記されている。

財団設立30周年を前にして、不安、不透明の現代における「新たな幸せづくり」を高く掲げていきたいと思う。ユーラシア時代における、島国日本と大陸とのコミュニケーションのあり方については、さらに次年度に譲りたい。

明日のためにまず足元を固める

トヨタ財団　常務理事
蟹江宣雄

1. 財団に入って

歴史と伝統のあるトヨタ財団常務理事に平成14年7月から就任させていただきました蟹江宣雄と申します。私は、トヨタ自動車販売に昭和46年に入社して以来、昭和57年のトヨタ自動車工業、トヨタ自動車販売の合併を経て、31年間「会社生活」を過ごしてきました。その間、人事部、秘書部、国内営業、東京秘書部、経営企画部を経て、平成14年1月に財団法人トヨタ財団に出向となり、事務局長に就任いたしました。トヨタ自動車では、トップ役員の秘書を長く経験し、そのお陰でトヨタ自動車という大企業の社会貢献活動にも関心を持ってまいりました。企業という存在は、ますます、社会との関わりが強くなっているという実感を肌で感じてまいりました。

事務局長として、いろいろな方にお目にかかっていくうちに、暖かい励ましの言葉をいただいたり、しっかり頑張れと激励されたりして、財団法人の社会における大切さを、身にしみて感じていくようになってきました。財団の先輩に当たる方からは、財団法人は社会変化の触媒機能を果たすもの、財団法人は人間で言えば肝臓のように社会の浄化作用を果たすもの、というアドバイスもいただきました。

2. 財団でのさまざまな印象

トヨタ財団は寄附行為の上で、本拠を新宿に構えております。発足以来新宿三井ビルという都心の好立地で仕事をさせていただいております。出社初日の印象ですが、その高層ビル37階において、職員が仕事にいそいそと励んでいる、朝から夕方まで静かな雰囲気の中で仕事をしているという印象でした。「おはよう」とか、「お先に」等の挨拶が少ない、ひょっとしたら活気がないのでは、という印象も持ちました。出社も日を重ねていくうちに、財団のマネジメント側と職員の間に、また、職員相互の間にも微妙な壁のあることも分かってまいりました。中には、仕事人間なのかマイペース人間なのか、勤務時間には必ずしも正確でない職員もいました。

さて、財団法人は、民法に根拠を有する歴史の古いものでありますが、現在、公益法人改革という政府のスローガンの下、改革の荒波に揉まれようとしております。政府は「改革」という単語を使用していますが、私ども公益法人にとっては、どうも、「改悪」のにおいもしております。政府は公益活動というものが、もはや政府の独占するものではないという厳然

たる事実に目をそむけ、いまだに形を変え支配を行いたい様子のように見えます。また、公益法人の中には、確かに良くない団体もあることは事実であると思います。しかし、「角を矯めて牛を殺す」ということもあります。公益活動を支える税制への手当てが極めて不十分であることを自覚せず、民間公益活動に対して税制優遇(われわれから見ると税制支援)策をあの手この手で取り上げようとしているように見えます。私は、平成14年4月に公益法人協会米国ミッションで米国のフィランソロピーの実情を目の当たりにしましたが、日本とは比べものにはならない程の底の深さを学んでまいりました。公益法人はこうした政府の姿勢に対して、こぞって、批判的な意見を出しております。現在、公益法人、特に財団法人は、大変な岐路に直面していると思っています。

3. 常務理事としてまず足元を固める

着任してからの事務局長時代の半年間は、いわば見習いのための期間でもありました。当時の財団には、難しい問題もありました。財団の財政状況の把握にも努め、トヨタ自動車へ財団の中期構想を踏まえて財政支援の依頼にもまいりました。その場では、財政支援の前提として、財団業務の自己評価を行い計数的に効果を証明してはどうかと言われ、果たしてそれが可能かどうか、考えさせられたこともありました。また、職員の理解に努めるべく、個人懇談も実施しました。それらを踏まえて、私の業務運営上の方針として、「透明、公正、オープンドア、信頼」の4つを置き、職員に説明しました。

そして平成14年7月に常務理事に就任させていただきました。常務理事は、山口日出夫氏、黒川千万喜氏に続いて3代目になります。私は、トヨタ自動車出身ではありますが、財団の一員になりきるつもりで、謙虚に誠心誠意努めてまいりたい、と思っております。私は基本的姿勢として、財団の現状に鑑み、ハイテンションではなく、ローキーでまずは臨みたいと考えました。理由としては、私には、就任早々に「はじめから研究助成ありきで良いのだろうか」と財団業務の現状に問題提起された先輩常務理事のような輝かしさはありませんが、まず、何より大事なのは足元をしっかり固めることが必要ではないか、と思ったからです。また、トヨタ自動車でしっかり教え込まれたことですが、言葉が踊ってはいけない、ということがあります。威勢の良い掛け声も大事ですが、問題はそれが実行できるかにかかっている、言葉は綺麗でも浮付いていては何にもならないからです。この際大事なことは、トヨタ財団発足の原点に立ち返り、「失くしてはならないもの」を再確認し、「変えるべきもの」は変えていくことであると思います。

まず、人事体制面では、常務理事就任当初からの抜本策も考えたのですが、ベテラン職員の意見を尊重して、人事は先送りをいたしました。職員理解のための個人懇談は、年初に引き続いて、改めて行いました。理事長には多忙な日程を割いていただき、定期的報告会を実施させていただきました。また、理事長には、平成15年1月に、長野県の蓼科地区で実施した1泊2日のプログラムオフィサー合宿勉強会にも参加していただきました。私の関心事として財団業務に精通するため、また、職員にも財団業務を改めて振り返ってもらう機会とするため、財団に関係されておられる方々の中で、まず、林雄二郎評議員(初代専務理事)、石井米雄理事、星野昌子理事、NPO界でご活躍中の山岡義典氏ら4名の諸先

輩の方々のご協力をいただき、「有識者懇談会」という名称で職員全員参加による勉強会を実施いたしました。財団の大切な資産運用については、厳しい現状の中で、安全確実な運用のため、内部けん制や理事会報告など、従来以上の改革を試みました。

トヨタ自動車は現地現物というものを大事にしておりますが、私は財団でも同じではないかと思っています。トヨタ財団は助成財団であります。多くの助成先の方々に、囲まれて、育てられてまいりました。研究助成、市民活動、東南アジアなど財団のプログラム毎に、現場があります。私は、なるべく多くの機会を作り、現場の生の意見を伺いたいと思っています。例えば東南アジアでは、インドネシア、タイ、マレーシア、カンボジア、ヴェトナムを既に訪問いたしました。フィリピン、ラオス、ミャンマーはこれからです。それらの各々の国を担当するプログラムオフィサーが、財団には専任でおります。現地へ一緒に行き、オフィサーの仕事振り、いろいろな苦労を見聞するのも大切であると思っています。

4. 30周年を来年に控えて

財団にとって極めて大事な時期に、私は入らせていただきました。丁度、来年(平成16年)10月に設立30周年を迎えます。30周年の記念として、いろいろなことを検討させていただいております。その中心が、30年間の歴史の編纂であります。財団のこれまでを振り返り、未来につながる年史を編纂させていただきたいと考え、平成15年4月より専門の編纂委員会を立ち上げました。委員長は常務理事、委員には林評議員、石井理事、山口日出夫理事、編集の専門家早山隆邦氏ならびに龍澤武氏、などにご就任をお願いいたしました。日本語版の完成は平成18年3月を予定いたしております。30周年の記念事業企画の他に大切なことは、財団の将来問題であります。資産、プログラム、人事、など難しい問題が待ち受けています。私は、財団の総力を結集して、正面から真摯に立ち向かい微力ながら全力を尽くすことを、ここに誓います。理事、監事、評議員、選考委員の先生方をはじめ、ご関係の皆様方のご指導ご鞭撻を心からお願いし、私のご挨拶とさせていただきます。

I

研究助成プログラム

I-0 研究助成プログラムの概要と活動結果

トヨタ財団の2002年度研究助成は、「多元価値社会の創造」を基本テーマに2002年4月1日から5月20日まで一般公募を行い、合計で過去最高の1,138件の応募を得た。この中から厳正な選考を経たのち、77件、総額2億1,289万円を助成対象として第100回理事会において決定した。

本年度も、研究助成A(個人研究)と研究助成B(共同研究)の2つの枠組みで募集を行った。
基本テーマの下、昨年度同様に、

1.「多様な諸文化の相互作用：グローバル、リージョナル、ローカル」
2.「社会システムの改革：市民社会の発展をめざして」
3.「これからの地球環境と人間生存の可能性」
4.「市民社会の時代の科学・技術」

という4つの課題が設けられた。

選考体制は、研究助成Aでは課題1から4まで合わせて内海愛子(恵泉女学園大学教授)委員長以下8名からなる選考委員会が、研究助成Bでは課題1に対して鯉渕信一(亜細亜大学学長)委員長以下6名からなる第1委員会、課題2に対して中村尚司(龍谷大学教授)委員長以下5名からなる第2委員会、課題3と4に対して、小木和孝(財団法人労働科学研究所主管研究員)委員長以下5名からなる第3委員会が、それぞれ選考にあたった。

選考の結果、研究助成Aでは43件・5,769万円、研究助成Bでは第1委員会から10件・5,520万円、第2委員会から9件・4,500万円、第3委員会から15件・5,500万円が選出された。応募ならびに助成対象の統計は表にまとめて次ページに示す。

全申請者のうち外国人の占める割合は25%であった。

申請件数に対する助成件数を採択率とした場合、全体では6.8%、研究助成Aで6.9%、研究助成Bの第1委員会で6.2%、第2委員会で5.9%、第3委員会で7.5%と、極めて高い競争率となっている。

[表I-1] 研究助成の枠組み

研究種別	研究助成A（個人研究対象）	研究助成B（共同研究対象）
研究の性格	若手研究者による 自由で独創的な個人研究	共同研究。特に国際共同研究を重視
1件当たり助成金額	概ね100万～200万円／件 200万円／件を上限とする	概ね400万～500万円／件 2,000万円／件・2年間を上限とする
助成予定総額	約6,000万円	約1億6,500万円
助成期間	2002年11月1日より1年間	2002年11月1日より1年間または2年間

[表I-2] 研究助成　2002年度　申請内訳

[課題1]多様な諸文化の相互作用：グローバル，リージョナル，ローカル
[課題2]社会システムの改革：市民社会の発展をめざして
[課題3]これからの地球環境と人間生存の可能性
[課題4]市民社会の時代の科学・技術

金額単位：万円

		全体合計	研究助成A	研究助成B				
				第1委員会	第2委員会	第3委員会		
				課題1	課題2	課題3	課題4	研究助成B計
申請件数						148	51	
		1138	625	162	152	199		513
		★1 1091	630	150	127	184		461
申請金額合計						156,324	57,744	
		644,481	104,884	164,663	160,866	214,068		539,597
		★1 461,395	102,795	117,858	93,338	147,404		358,600
平均申請金額		566	168	1,016	1,058	1,076		1,052
申請者平均年齢		42.2	33.9	47.9	46.9	48.6		47.8
申請者性別	男	769	351	129	114	175		418
	女	369	274	33	38	24		95
英語による申請		226	120	40	20	46		106
海外及び外国人からの申請★2	F/F	167	69	40	19	39		98
	F/J	122	96	9	8	9		26
	J/F	127	111	5	3	8		16
	計	416	276	54	30	56		140

[表I-3] 研究助成　2002年度　対象内訳

金額単位：万円

		全体合計	研究助成A	研究助成B				
				第1委員会	第2委員会	第3委員会		
				課題1	課題2	課題3	課題4	研究助成B計
助成件数						14	1	
		77	43	10	9	15		34
		★1 72	40	12	7	13		32
助成金額合計						5,150	350	
		21,289	5,769	5,520	4,500	5,500		15,520
		★1 18,597	5,384	4,970	3,093	5,150		13,213
平均助成金額		276	134	552	500	367		456
代表者平均年齢		40.7	35.6	48.4	43.7	48.3		47.1
代表者性別	男	53	25	8	7	13		28
	女	24	18	2	2	2		6
海外及び外国人への助成★2	F/F	11	1	4	2	4		10
	F/J	12	11	1	0	0		1
	J/F	4	4	0	0	0		0
	計	27	16	5	2	4		11

[表I-4] 採択率（対象件数／申請件数）

単位：%

		全体合計	研究助成A	研究助成B				
				第1委員会	第2委員会	第3委員会		
				課題1	課題2	課題3	課題4	研究助成B計
採択率						9.5	2.0	
		6.8	6.9	6.2	5.9	7.5		6.6
		★1 6.6	6.3	8.0	5.5	7.1		6.9

注　★1――2001年度の実績
　　★2――F/Fは，代表者が海外在住の外国人　F/Jは，代表者が日本在住の外国人　J/Fは，代表者が海外在住の日本人

トヨタ財団研究助成A［個人研究］の選考について

内海愛子［選考委員長］

現在、日本では科学技術研究費や民間の財団による研究助成など、いくつかの研究助成がある。「トヨタは落とされたが、科研費は通った」とかその逆の話も耳にした。これは、トヨタ財団の研究助成が科研費を補完するものではない、ユニークな研究助成のあり方を追求していることを物語る話である。では、トヨタ財団は何をめざしているのか、その研究助成の特徴が、応募要項にはっきりと打ち出されている。

「現場から生まれた具体的な研究課題」を優先し、社会で何らかの「実践や運動を呼び起こす力になるような研究」あるいは「研究と実践の中間領域にあるような試み」である。

独創的な研究やユニークな発想にもとづく研究、時代を先取りしたような研究は、つねに困難が伴っている。既成のアカデミズムの世界で認められるまでの長期間、研究者は在野でこつこつと研究を積み重ねていることが多い。トヨタはこうした在野の学問研究を応援したいという。現場から発想し、現場に還元できるような在野の研究を、活性化させることである。応募要項に打ち出されたこうした研究助成の姿勢が、応募者の特徴にもあらわれ、600件を越えるユニークな研究への助成申請が出された。

選考委員会は6月10日に、選考準備会を開き169件の申請書を第一次候補として確定した。こうして選考された申請書をそれぞれ4人の委員が精読し、選考委員一人12件の推薦を決定した。この間1ヵ月あまり、多くの申請書に込められた真摯な研究の中から、誰を、どの研究を推薦するのか、選考委員ひとりひとりが膨大な書類を前に、迷い悩んだ日々だった。選考委員の顔ぶれは、ジェンダーバランスもよく、国籍も多様で、さらにいえば年齢の幅もあるなど、絶妙な組み合わせになっていた。これが選考にどのように反映されるのか。

選考委員の苦闘のあと、7月23日に選考委員会が開催されたが、8時間を越す議論が繰り広げられた。途中、休憩が15分のみというハードスケジュールだったが、それを感じさせないほど熱のこもった議論が続いた。

各自が時間をかけて決定した申請書にたいして、それぞれ推薦の理由を述べていく、それへの疑問や反論がだされる、あるいは応援の発言がでる。これを推薦された申請書一件一件についてくり返していった。あまりに実践にウェイトが置かれており、研究としてまとまるのか、アジアには多くの紛争地域があり、そうした地域を研究対象として研究できるのか、研究対象の言語を習得していないのは問題ではないのか、研究が政治に利用される危険性はないのか、独創的とは言えないのではないのかなど、忌憚のない意見が出され、それに反論する推薦者……。委員の一人は、学際的な研究か、他では助成が難しいユニークなものか、問題を深くとらえたものか、現場性など、いくつかの基準を決めて、独自に申請書を点数化する方法を考え出していた。他の委員も数値化はしていないものの、専攻研究の分野から独創的な研究に光をあてようとしていた。

今年の申請のなかにはNGOでの長年の実践をふまえた研究がいくつか出されていた。アジアやアフリカなどでの実践活動のなかから生まれた疑問を、研究のなかで解決しようと大学院に戻った人たちの研究である。そこでの研究成果が、再び社会的活動の場に反映されることが期待できる。長年にわたって、タイのスラムで子どもたちの支援をするNGO活動を続けてきた東大の大学院生秦辰也さんの場合は、「子どもが参画したまちづくり」という具体的なテーマを都市工学の視点から取り組もうとしている。スラムでの子どもたちの問題を知りつくした実践家が、都市工学という学問からスラムをどのように子どもの視点からつくりかえていくのか、現場から研究にそしてまた現場へと、研究が将来の活動に活かされていくことが期待できる研究である。日本赤十字社で働いている田中康夫さんの場合も長年の国際救援活動をふまえた研究である。

日本のNGO活動は、今や第4期に入ったと評する人もいる。イギリスやアメリカなど世界のNGOと肩を並べて、世界的なネットワークで活動を続けるところも出てきた。しかし、財政的基盤が弱い、学問的な裏付けが弱い、技術水準が低い、人材の確保が難しいなどの問題をかかえ

ているところも多い。NGOという言葉も流布されておらず、その活動も認知されていない時代に、率先して困難な現場に飛び込んだ人たちの中には、今、長年の活動を整理し研究しようとしている人も出ている。秦さんたちのような研究は、今後、増えるのではないだろうか。日本語や英語だけでなく活動現場のアジアなどの言語を駆使し、人びとの目線で現実を捕らえて実践をしてきた人たちが、必要に応じて研究の場に戻ってくる。このことは双方にとって有益ではないだろうか。だが、今の日本では、そうした実践と研究の双方向の交流がまだまだできにくい。一番の問題は、生活費と研究費の問題であろう。今後、増えることが予測されるこうした研究を支えることも、トヨタ財団の活動の一つに出来ないだろうか。

非漢字圏の外国人研究者が、苦労しながら日本語で申請書をまとめていた。また、今回選ばれた研究者の特徴の一つは、必ずしも「若手」でないことである。非常勤講師などで生活を支えながら、独創的な研究を続けている30代、40代、そして、50代の「若手」研究者が、20代30代の大学院生にまじって多く助成対象に選ばれている。研究のテーマが、既成の学問分野でなかなか受け入れられないような場合、トヨタ財団ならではの支援をしたいという選考委員の希望である。

韓国の金惠信さんも苦労して研究を続けていることが読みとれる。彼女の研究テーマは「近代期朝鮮の美術表象と植民地期以降の韓国における歴史の記憶と異文化表象・展示に関する考察」である。フランスに留学していた彼女の場合、ジェンダーの視角から朝鮮・韓国の美術史を読み解き、日本の植民地支配の時代をも視野に入れたユニークな研究を続けてきた。日本の美術史の世界では、若桑みどりや千野香織などが苦労しながらジェンダー研究を進めてきたことはよく知られている。金惠信さんは千野香織さんに師事していたようだが、その千野さんが先日、急逝した。おそらく、金惠信さんの研究生活をとりまく状況はこれからも苦しいとおもわれる。それにもかかわらず、伝統的な美術史の分野に意欲的に問題を提起していることを評価した。

また、56歳の津田命子さんへの助成を決めた。津田さんは、北海道の地で長年にわたってアイヌ研究に取り組んできた方である。アイヌ衣服の変遷と文様構成の展開を縫い手の抱える要因から分析するというユニークな研究である。生涯学習がさけばれるなかで、津田さんのように年齢を重ねながらユニークな研究を進めている人は今後も増えていくだろう。こうした研究者を支援していくことも、トヨタ財団の一つの働きではないのか。

実践とか現場とかを強調するので、アカデミックな学問研究を軽視しているのではないのかという疑念をもたれる方もいるかと思うが、優れたアカデミックな研究にも助成が行われていることは一覧表を見ていただけば了解していただけるものとおもう。20代30代の若手が意欲的な研究に取り組んでいる。彼らの成果が出てくるまでには、少しの時間がかかることもあるだろうが、将来が楽しみである。

なお、アメリカなどの大学の博士課程に在籍する者に対する助成については、2001年の船曳建夫選考委員長のコメントの中で次のような文章があった。「海外、たとえばアメリカに留学している申請者から、日本やアジアをテーマにした申請書が届く。その研究の成果である論文は、誰に向かって書かれているのであろうか。日本がテーマであるのなら、そのテーマを扱っている日本の学界の学問の水準は、意識されているか否か。そもそも、アジアのある社会が扱われているのなら、その社会の大学に留学せずにアメリカなりヨーロッパに留学しているのはなぜか。」この点については、今年度も議論となり、結果としては、欧米の大学に留学している日本人からの申請よりもアジア諸国で研究している日本人、またアジア諸国からの留学生からの申請が多く採択された。

研究助成B［共同研究］第1委員会の選考について

鯉渕信一［選考委員長］

本委員会では、課題1「多様な諸文化の相互作用：グローバル、リージョナル、ローカル」について選考を行った。当課題への申請件数は162件（昨年150件）であった。第一次選考に残った30件について各委員が8件ずつの推薦をあげ、7月11日の委員会で推薦のあった案件について慎重に審議を行った。選考の結果、新規9件、継続1件、計10件5,520万円が採択候補となった。

選考にあたっては、特に研究目的および研究手法に独創性、具体性があるか否か、成果が十分期待できるか否か、その成果が単なる論文成果としてのものではなく、社会的意義があり、かつ今後の展開が期待できるか否か等々を重点にして審査を行った。

こうした選考基準に沿って今回採択された10件の研究を概観すると、幅広い分野にまたがっており、研究目的、手法などの面でそれぞれが独創性と具体性を持ち、今後の展開を予見させるものであった。以下、採択に至った研究の概略である。

「台湾における道教寺廟建造物装飾彩色の技法画材調査と保存修復方法に関する研究」（山内章）は、台湾・台南市の道教寺廟「興済宮」などを対象にして、日本の修復・保存技術を参考にしつつ、台湾における文化遺産の保存方法を従来の「描き直し、塗り替え」中心から原型の維持・修復保存へ転換するためのモデル、理念を実践的調査、研究、修復を通して構築しようというものである。文化遺産の修復・保存はアジア諸国が抱える問題でもあり、社会的意義が大きく、また若手研究者・技術者育成にも結びつくものと評価された。他方、「修復」自体よりも調査、修復技術、保存方法の研究に重点が置かれるべきだとの意見もだされた。

「台湾原住民文化運動」（下村作次郎）は、複雑な原住民グループにより構成される台湾社会にあって原住民族の政治的、社会的、文化的役割を調査・研究するものだが、台湾のみならずアジア諸地域において今後、急速にその重要性が高まっていくであろう多文化共生社会の創造に向けての基礎的研究をなすものとして評価された。一方、研究方法に一層の工夫が欲しいとのコメントも出された。

「モンゴル帝国の成立過程に関する考古学的研究」（白石典之）は、モンゴル帝国興隆の原因の一つをモンゴル東部アウラガ遺跡において明らかにしようとするものである。世界史、とりわけ東西文明交流史におけるモンゴル帝国の果たした役割は極めて大きいにも関わらず、文献および考古学的資料が少ないことから、特にその初期の実態は殆ど解明されていない。そうした中で、本研究は鉄工房跡に焦点を絞って実証的解明を進めようとしており、そこから新たな研究の展開が期待できることが評価された。

「20世紀の朝鮮半島における軍隊と性暴力」（金 栄）は、軍隊と性暴力の相関関係を政治的、経済的、社会的、文化的側面から解明することを目的としている。この問題はこれまで個別的に取り上げられることが多かったが、本研究は朝鮮半島全体を対象にして、しかも日本の植民地統治期、朝鮮戦争期、南北分断期および現在に至る長期的視野で幅広く軍事体制と性暴力の関係を多面的に解明しようとしている点が評価された。

「国立療養所におけるハンセン病元患者の生活世界に関する文化人類学的研究」（加藤尚子）は、療養所での生活世界の諸相とその変遷を、特にジェンダーの視点から解明しようとするものである。ハンセン病問題に関する研究は多いが、入所者や関係者など当事者側からの日常的な療養所生活に関する「発言」を中心に研究したものは少なく、本研究はハンセン病研究に新たな視点を加えるものであり、しかも当事者の年齢構成から緊急を要するものであることから採択に至った。

「1920年代中国西部辺境における民族紛争」（陳慶英）は、中国建国以前に20年もの長期にわたって中国・雲南、四川、青海、チベットなどの地域で研究を行ったジョセフ・F・ロックの記録資料を整理、分析、紹介しようとするものである。建国以前のこれら地域の資料はきわめて少なく、ロックの残した日記をはじめとする民俗学的、言語

学的、生物学的な多様な資料はきわめて貴重であるが、その多くが未公開のままである。中国国内を含めて、これら資料を幅広く利用に供することはこの地域の研究のみならず、少数民族理解を深めるのに有益であると評価された。ただ共同研究者に広がりがなく、幅広い分野の研究者の参加が望まれるとの意見が出された。

「アジアの屋台」(萩島哲)は、日本の屋台と中国、台湾、韓国、ベトナム、インドネシア各国の屋台を総合的に比較分析して、アジアにおける都市空間としての屋台空間のあり方を明らかにしようというものである。アジア諸国において屋台や露店はコミュニティ形成、雇用創出といった重要な役割を担う一方で法規制、環境・衛生問題などの面で様々な矛盾も抱えているわけだが、本研究は屋台空間を積極的に評価し、都市活性化に繋げようという視点に立っていることが評価された。一方メッセージの発信方法などに一層工夫が必要とのコメントも出された。

「タイ法廷での『伝統的共同体の権利』条項の適用をどのように促すか」(ピシェッ・マオラノン)は、経済開発と並行して国家レベルの法整備が進むタイにおいて、伝統的な共同体的権利を法制度の中でいかに適応させるべきかを追求するプロジェクトであるが、特に日本の近代化の中で制度化された「入会権」の概念を研究し、導入をはかろうとするところに本研究の特徴がある。途上国では開発政策の中で、特に少数民族の伝統的な農漁山村の共同体的な権利をいかに守るかが緊急の課題となっており、タイのみならず、本研究の意義は大きいと評価された。

「日本植民地主義と東アジア人類学」(全京秀)は、前年度の「日本の近代植民地主義と人類学に関する予備的研究」の継続研究である。韓国と台湾における日本植民地支配に果たした日本人類学の役割を解明しようとするもので、韓国と台湾の人類学者が国境を越えてデータと問題認識を共有し、それぞれの地域で行われた人類学的な作業を比較することの意義は大きいと評価された。前年度の予備的研究の課題でもあった韓国側研究者と台湾側研究者の研究交流と信頼醸成が進み、互いの問題認識の共有が十分なされて準備段階は完了し、本格的研究に着手できると判断された。

「植民地韓国における『帝国』の日常生活支配」(孔提郁)は、日本の植民地支配が韓国の日常生活に及ぼした影響を分析し、植民地的近代化の形成過程とその特徴を解明するものである。植民地支配研究の多くが近代化論と搾取論という観点からの研究であったのに対して、日常生活に焦点を当てて文化社会的観点から分析しようとする新たな視点が評価された。一方、殆ど朝鮮総督府機関紙のみを研究材料としている点、またメンバーの多様性に欠ける点など、研究方法やメンバーの広がりに配慮すべきとの意見も出された。

なお選考委員会において各委員から申請全体の講評をいただいたが、その中で多くの委員から独創性があり新しい研究の芽を感じさせるもの、或いは社会的意義の大きいものも少なくないが、全体としてテーマのスケールが小さく広がりに欠けるもの、将来的に大きな展開を予見させる申請が少ないという指摘がなされた。また共同研究としての方法論について十分な議論がなされていないもの、共同研究者の役割が不明確なもの、具体的な成果、展開、発展が読みづらいもの、申請金額算出が不明瞭なものなどが多いとの指摘があった。また課題の性格上からか、政治分野の申請が少なかった。

研究助成B［共同研究］第2委員会の選考について

中村尚司［選考委員長］

研究助成B2「社会システムの改革：市民社会の発展をめざして」では、前年度に引き続き、どちらかといえば、高度に学術的な研究成果をめざす探究よりも、転換しつつある現代社会においてどのような改革が可能か、なるべく具体的に模索することを主要な課題としている。この部門では世界的な改革の潮流の中で、市民社会が従来の国民国家システムを中心とする経済社会のあり方を改革するために提言し、そのために必要なアイディア、方法、分析、活動の取り組み方などを求めたいと期待している。そのような新しいシステムの構想は容易でなく、試行錯誤を重ねながら進めるよりほかないであろう。

2002年度における助成申請の主題と、助成候補の研究課題を大づかみに概括すると、いろんな意味で2001年9月11日の事件の波紋が響いている。国際的な人間安全保障の課題が、さまざまな角度から取り上げられている。またODA予算の削減の影響か、従来は見られなかった国際開発関連のコンサルタントからの申請も、本年度の新しい傾向である。民間助成財団における調査研究活動への助成申請もまた、このような時代の産物であることを教えている。そのような背景もあって本年度の申請は、全体として国際的な比較研究の試みが多い。そのため、海外出張旅費の比重が高い研究費の構成となっている。人件費が助成対象にならない現状ではやむをえない側面もあるが、その場合、申請上限2,000万円の申請には無理が伴う。申請する側も選考する側もともに、限られた財源の中で個々の助成金額を抑えて、できるだけ多くの件数に助成できるように配慮したいものである。

梅林宏道「市民社会が構想する北東アジアの地域安全保障の枠組み」は、長年アジアの非核化に取り組んできたグループが、近年のASEANやモンゴルの非核化宣言を受けて、北東アジアの非核化を含む地域安全保障の枠組みを構想する研究で、本年度では最も高額の助成候補に相当するという高い評価を受けた。

名川勝「障害者の消費生活トラブル解決へ向けて」は、日本の成年後見制度や支援制度の問題点を明らかにし、主に知的障害者が地域で安心して暮らせる制度のあり方を提言する研究である。英米との比較よりも北欧との比較の方が、よりすぐれた知見を得られるのではないかという意見も出たが、現代的な課題としてぜひとも取り組むべきだという意見が強かった。

寺田匡宏「多元的な記憶をどう伝えるか」は、新しい歴史研究の潮流に棹さすもので、戦争と災害後のモニュメント・記録・語りの文化史的研究をミュージアム構想につなげる点で、市民社会の発展にふさわしい実践的な研究である。ただし、ベルリンやニューヨークまで調査に行かなくても成果を上げることができるであろうという指摘があり、主に国内調査に限定する形で研究計画を縮小して取り組んでもらうことになった。

武者小路公秀「東アジア・東南アジアにおける国際テロ／国際組織犯罪対策の比較研究」は、文字通りこのような時代背景を直接的に社会システムの改革に取り組もうとした野心的な試みである。非常に多くの研究参加者の成果をどのようにまとめるか、調査研究を進める上で難しい問題もあるが、選考委員会で最も高い支持を受けた申請である。

堀芳枝「100円ショップ研究」は、アジア太平洋資料センターの会員が主たる構成員で、バナナ、エビ、ヤシ、かつお節などアジアの商品を取り上げて、調査を続けてきた仕事の延長線上に企画され、グローバル経済への切り込みの仕方に期待が寄せられた。

海外からの申請については、次の2件が助成候補となった。双方とも韓国からの申請である。

韓洪九「韓国における民主主義体制への移行と軍事主義の解体に関する予備研究」は、相対的に巨額な軍事費と成年男子の7割が2年以上の兵役義務を負う現状から、非軍事的な社会システムへの移行と再統合への道を研究する。北東アジアの将来にとって非常に重要な課題であるが、研究が困難な分野である。非軍事化への道を開く成果を期待したい、という声が強かった。

白永玉「中国東北地方の女性難民に関する基礎的研究」は、最近の瀋陽総領事館事件で日本の外交のあり方にも大きな衝撃を与えた、生々しい国際人権問題に取り組む。本研究では中国東北地方に住む北朝鮮離脱者に関する実態調査をするとともに、人道的支援のための国際協力の在り方を提言するもので、研究助成B2の課題にふさわしい。

次の2件については、当初2年計画で申請されたものであるが、選考委員会の判断で、ひとまず1年間だけ予備的に実施し、継続の可能性を改めて考えることにする。

五十嵐敬喜「市民の憲法事典の編さん」では、憲法に関連する言葉(用語、成語、慣用句、言説を含む)が、市民社会の成熟から乖離しているという現状を克服するために、市民主権の立場から言葉を再検討し、事典として編さんしようとする。たいへん時宜を得た野心的な試みであるが、どのような形で実現できるか、今回は1年間だけ予備的に研究して、将来の事典完成に向けて、どの程度の作業が必要か検討してもらうことになった。

村田幸雄「市民向けPRTR(有害物質排出移動登録)情報公開ウェブサイトの創設手法の検討と海外市民サイトとのネットワーク化の可能性の研究」は、日本で2001年4月に始まったばかりのPRTRの情報公開制度に取り組む。始まったばかりの上に、広がりの大きい課題でもあるため、本年度は予備的な研究にとどめ、将来の実現可能性を検討してもらい、事業化や他の支援を模索してもらうことになった。

本年2月22日にこれまで約20年間にわたって、分離独立をめぐって武装抗争を続け、6万5千人の戦死者、対人地雷の死傷者、100万人を越える難民などを出したスリランカにおいて無期限の停戦が、政府軍と反政府のLTTE軍との間で実現した。それに伴って、和平のプロセスに貢献すべく、日本を離れてスリランカで過ごすことが多くなり、本選考委員会の仕事を引き受けることを躊躇したが、同僚の委員会メンバーだけでなく、トヨタ財団の役職員の方々のご援助でつつがなく選考の仕事を終えることが出来た。この場を借りて謝意を表明したい。

研究助成B[共同研究]第3委員会の選考について

小木和孝 [選考委員長]

B3委員会は、課題3「これからの地球環境と人間生存の可能性」と課題4「市民社会の時代の科学・技術」の2課題について、5名の委員の合同討議によって選考を行った。選考に当たっては、背景や分野を異にする研究者が共同して取り組むことによってこれらの課題にそって新たな展開を図れる研究、その共同の成果が現場の問題解決にインパクトを与える研究に主眼をおいて意欲的な研究を取り上げるように努めた。その結果、研究助成対象として、課題3で14件5,150万円、課題4で1件350万円、合計15件5,500万円が採択となった。この総額は、本委員会が財団から提示された予算額に見合う額であった。本年度の応募案件に充実した内容をもつものが少なくなく、これら15件以外の候補についても十分に検討を行って、申請額を勘案しながら選考を行った経緯を示している。

本年度の応募数は、課題3が148件、課題4が51件であり、特に課題3についてやや増加していた。例年のように、応募内容には案件によりかなりの質の差が認められたが、共同研究として目標と共同方法、成果について十分な検討を行ったとみられる応募が決して少なくなく、本研究助成の意義が広く認められつつあることを示すこととして印象に残った。課題3の採択件数が多かったのは、課題3と課題4については課題別に選考を行わずに、両課題にとって意義の大きい応募を取り上げることに選考の趣旨をおいた結果である。内容的に両課題に関連する応募も認められ、市民社会時代の科学・技術を扱うときに広義の環境問題や人間生存とその条件改善を志向する共同研究に従来以上に力点が置かれる事情も反映

しているようであった。両課題の設定とその関係整理について、なお検討を要することを示唆しているとも考えられる。

本年採択された助成研究テーマには、開発途上国ですでに行われつつある共同研究、これらの国の現場の問題解決にさらに取り組むものが多かった。アジアとアフリカの開発途上国との共同研究が大半を占めたのは、研究交流の現状をそれなりに示すものと見られる。その中で、環境問題と生産や地域生活との相互関係に着目して、住民との連携やその参加を基盤に研究の実を挙げようとする傾向も認められた。国内の問題についても、同様に、持続可能な循環型社会に向けた協力の仕組みに焦点を合わせた助成研究が採択されている。くらしとの接点研究が共通する。

アジア地域の環境保全と地域開発を扱ったテーマには、環境共生型エビ養殖(高橋徹ら、ヴェトナム)、富栄養化水域浄化と農業由来排水処理(宋祥甫ら、中国)、アグロフォレストリー開発(田光龍ら、中国)、山岳民族の植物遺伝資源利用(グエン・ヴァン・ケーら、ヴェトナム)があり、いずれも地域の生業と関係付けて研究する。地域ネットワークによる環境と健康をみる参加型農業改善(トン・タット・カイら、ヴェトナム)、砒素中毒予防に関連する用水確保策(高野武男ら、中国)も新展開が期待される。貧困と土地開発の接点研究(米倉雪子ら、カンボジア)は地域開発の構造を扱い注目される。被曝実態調査(川野徳幸ら、カザフスタン)にも地域との連携が生かされている。アフリカ地域では、アグロ・エコシステム手法の導入(門平睦代ら、ザンビア)、沙漠化に対する共生的資源環境利用(田中樹ら、西アフリカ)が同じく環境問題と地域開発を関連付けている。国内における共同研究として、ダムに関連しての河川と海域環境評価(村上哲生ら)、赤土流出防止に役立つ栽培法(干川明ら)、島嶼地域における循環型社会の仕組み(崎山正美ら)がそれぞれのネットワーク視点を基盤にしている。また、コンソーシアム形成による再生可能エネルギー事業研究(大島堅一ら)は地域社会における事業の実行可能性を意欲的に取り上げる。これらの視点を総合して生かす形での水俣病事件と地域市民社会再生の研究(原田正純ら)は、大いに期待される。

応募案件の全体を通じて、主として環境保全と地域生活の問題解決に共同して取り組む研究と、地域産業と情報化社会の進展も視野に入れて科学・技術の開発と応用にチーム力を生かしていく研究とが特徴的に多く見られた。これは、財団による研究助成の課題設定を当然に反映しているが、国際的ないし分野横断的に共同研究を企画するときに、こうした課題解決に向かう志向が背景となることも指摘できよう。その場合、共同研究チーム内の連携と具体的な成果とが大いに問題となるが、この面の経験も蓄積されつつあることが、応募内容からうかがわれた。研究のねらいや企画内容の方向性、記述の分かりやすさなどに注文をつけたい応募もなお少なからず見られたが、そうした意欲的な研究応募があることが特に注目された。

選考は7月に開催された委員会に各委員の予備選考結果を持ち寄り討議することによって行われた。個別に応募内容の独創性、計画の実現可能性、これまでの実績を検討するとともに、民間財団から助成を行う妥当性の観点からも審議した。各委員による評価が一致する応募が少なくなかったので、なお候補案件について、共同研究チームの内容、研究成果のインパクト、特に民間助成を行う意義についてもすすんで検討を行うことができた。共同研究が継続的に展開することによって、より実り多いものとなるのは事実であるが、本研究助成の性格上、年限を定めて助成することから、そうした継続的な成果に十分な配慮を行うことはやや困難であった。課題設定や民間助成の意義の検討とともに、そうした共同研究育成上の問題点についても配慮していくことが望まれる。この意味で本研究助成の特性を反映しての充実した共同研究への動きが感じられたのは心強く、こうした傾向は十分評価できる。他方、助成の趣旨からみて独創的で開発的な研究に目配りしておくことは、ぜひ必要であり、選考を行う委員会にとって、上記の共同研究育成の観点とともに、今後重要と考えられた。

環境と人間生存の視点からの問い直し、調和ある市民のくらしへの科学・技術の寄与に多くの関心が寄せられ、本研究助成にも多数の応募を見たことは、感慨深い。そのごく一部についてのみ助成を実現するのは、多分に心残りな点であるが、1件当たりの助成水準を維持することも重要であり、やむをえない面もある。限られた助成であっても、そうした多くの関心を支えていくことに、民間助成システムが貢献を行っていく意義は今後ますます大きいと感じられた。

I-1 研究助成A［個人研究］

◎助成対象一覧
助成番号下の（継X）は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円)
		課題1 多様な諸文化の相互作用：グローバル、リージョナル、ローカル	
1	D02-A-142 （中国）	中国帰国者の生活に関する実態調査及び社会適応性の研究 劉 含発　山形大学教育学部　客員研究員　42歳	1,710,000
2	D02-A-155	多民族社会マレーシアにおける労働市場と就業構造に関する実証分析―― ブミプトラ政策の影響を中心に 岸脇 誠　大阪市立大学大学院経済学研究科　院生　31歳	1,500,000
3	D02-A-156	アナトリアの鉄器時代の地域文化について―― カマン・カレホユック出土の青銅製フィブラの考古学的研究を基礎として 山下 守　ミュンヘン大学文学部中近東考古学科　院生　47歳	1,400,000
4	D02-A-188	近世北海道におけるアットゥシの歴史的研究―― アイヌ文化の歴史性を解明する試みとして 本田優子　北海道立アイヌ民族文化研究センター　非常勤研究職員　45歳	1,540,000
5	D02-A-190	半檀家にみる「家」と寺院の関係史――宗門改帳の分析を中心として 森本一彦　総合研究大学院大学文化研究科　院生　39歳	1,500,000
6	D02-A-209	日本植民地時代の台湾における青年団をめぐる人類学的研究―― 台北州A街の事例を中心に 宮崎聖子　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科　院生　37歳	1,010,000
7	D02-A-242 （インドネシア）	産業地域バタム島開発によるオラン・ラウトへの影響 ルド・ウィボウォ　上智大学大学院　院生　28歳	800,000
8	D02-A-243 （ネパール）	現代ネパールの政治とマオイストの「人民戦争」 プラダナング・ラジェシュ　東海大学文学研究科文明研究所　研究員　34歳	1,400,000
9	D02-A-253	ロシアのアジア貿易に果たしたアルメニア商人とブハラ商人の役割―― 綿織物流通の観点より 塩谷昌史　東北大学東北アジア研究センター　助手　33歳	1,200,000
10	D02-A-262	農耕モンゴル地域におけるブフ（モンゴル相撲）の衰退過程およびその保存活動―― 内モンゴルの東部モンゴル人社会における実態研究 富川力道　和光大学人間関係学部　非常勤講師　38歳	1,500,000
11	D02-A-264 （韓国）	植民地朝鮮におけるアジア主義の受容―― 東亜協同体論と大東亜共栄圏構想を中心に 洪 宗郁　東京大学大学院人文社会系研究科　院生　31歳	1,070,000

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円)
12	D02-A-275	近世後期から明治期における日本・朝鮮の出版流通機構―― 出版業界の相互流通と知識人の役割を中心として	1,340,000
	(韓国)	方 美英　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科　院生　35歳	
13	D02-A-276	アイヌ衣服の変遷と文様構成の展開から縫い手の抱える外的、内的要因を探る―― アイヌ絵と道南(噴火湾)地方、サハリンの資料の分析を中心に	2,000,000
		津田命子　放送大学大学院文化科学研究科　院生　56歳	
14	D02-A-332	紛争下における女性の人権と暮らし――インドネシア・アチェの事例より	1,500,000
		佐伯奈津子　上智大学外国語学部　非常勤講師　28歳	
15	D02-A-340	近代期朝鮮の美術表象と植民地期以降の韓国における歴史の記憶と 異文化表象・展示に関する考察	1,510,000
	(韓国)	金 惠信　学習院大学　非常勤講師　43歳	
16	D02-A-366	ラオス少数民族への基礎教育普及格差に関する実証的研究―― 民族間普及格差をもたらす要因の社会経済学的分析	1,170,000
		滝田修一　ラオス国立大学教育学部　研究員　31歳	
17	D02-A-397	東北アジアにおける中国朝鮮族の移動とネットワーク形成に関する研究	1,600,000
	(朝鮮)	権 香淑　上智大学アジア文化研究所　共同研究員　32歳	
18	D02-A-427	インドネシア農村における離乳食――ヘルスケアの実践と変遷	1,300,000
		尾﨑敬子　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科　院生　35歳	
19	D02-A-437	開発プロジェクトと住民移転政策の社会学研究―― 中国・三峡ダム計画における立ち退き移転住民の「ストレッサー」認識と対応行動	1,500,000
		浜本篤史　東京都立大学大学院社会科学研究科　院生　30歳	
20	D02-A-443	柳田民俗学の組織化に関する基礎的研究―― 地方研究者ネットワークを中心に	1,110,000
		鶴見太郎　国立民族学博物館　外来研究員　36歳	
21	D02-A-461	韓国における墓地風水の現代的展開	1,500,000
		高村竜平　京都大学大学院農学研究科　院生　34歳	
22	D02-A-481	在台湾ビルマ華僑ムスリムの移住と社会的ネットワークに関する文化人類学的研究	1,000,000
		木村 自　大阪大学大学院人間科学研究科　院生　29歳	
23	D02-A-482	朝鮮学校とその教育課程に関する社会人類学的研究	1,300,000
	(韓国)	宋 基燦　京都大学大学院文学研究科　院生　31歳	
24	D02-A-511	非配偶者間人工授精を選択するカップルへの支援―― インタビュー調査に基づいたパンフレット作成とサポートシステムへの一考察	700,000
		清水清美　東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科　助手　40歳	
25	D02-A-564	ヒンドゥー社会における障害者観と政治性の人類学的考察―― 平等・不平等そして相互依存	1,660,000
		林 早苗　ブリューネル大学　院生　28歳	

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円)
	課題2 社会システムの改革：市民社会の発展をめざして		
26	D02-A-068	国際救援における援助受益者の保健医療サービスへの 参加の実行効果に関する縦断研究 田中康夫　東京大学大学院医学系研究科　院生　42歳	1,500,000
27	D02-A-097 (オーストラリア)	戦後日本における市民運動の台頭と展開――「告発」から「提案」へ サイモン・アベネール　カリフォルニア大学バークレー校　院生　32歳	1,500,000
28	D02-A-100	開発途上国におけるこどもの参画とまちづくりに関する研究―― タイ都市スラムにおける居住環境改善への取り組みを中心に 秦 辰也　東京大学大学院工学系研究科　院生　42歳	1,500,000
29	D02-A-191	滞日外国人への緊急医療制度のあり方 河本尚枝　龍谷大学　非常勤講師　35歳	1,680,000
30	D02-A-235	インドネシアにおけるマスメディアの自由――スハルト体制後における変化と連続性 島田 弦　東邦学園短期大学経営情報科　非常勤講師　31歳	1,000,000
31	D02-A-238	「新宿二丁目」のエスノグラフィー―― 「ゲイ・コミュニティ」の発達と日本のゲイの実像 砂川秀樹　東京大学大学院総合文化研究科　院生　35歳	1,000,000
32	D02-A-246 (ブラジル)	在日ブラジル人の「家族解体問題」とコミュニティ形態の影響―― 集住地域と分散居住地域における比較研究 ヤマグチ・アナ・エリーザ　一橋大学大学院社会学研究科　院生　30歳	1,500,000
33	D02-A-307	アメリカ占領下沖縄における出生力転換と〈女性〉たちの交渉―― 生殖・再生産の場に従事する助産婦・公衆衛生看護婦たちの活動を通じて 澤田佳世　津田塾大学大学院国際関係学研究科　院生　28歳	1,250,000
34	D02-A-327	イスラーム復興のネットワーキング―― トルコにおけるイスラーム政党支持層の社会・経済的な活動と人脈形成に関する実証研究 澤江史子　一橋大学大学院社会学研究科　院生　32歳	1,000,000
35	D02-A-415	トルコ地震後の市民組織における住民参画による被災者支援計画―― トルコの「市民社会」への契機として 鈴木瑛子　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科　院生　42歳	1,400,000
36	D02-A-557 (韓国)	在日コリアン女性の公領域参加と主体形成―― 東大阪市立太平寺中学校夜間学級独立運動とその展開を事例として 徐 阿貴　お茶の水女子大学大学院人間文化研究科　院生　36歳	1,000,000
37	D02-A-604	移住労働者と言葉の壁――「法の下の平等」から見た日本の国際関係論 滝 知則　ウォーリック大学　院生　39歳	1,000,000

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円)
	課題3 これからの地球環境と人間生存の可能性		
38	D02-A-066	野生種を利用した雑種生産における遺伝資源の活用―― インド・グジャラート州にみられる野生ロバと家畜ロバの伝統的共生管理の評価 木村李花子　馬の博物館　学芸員　43歳	1,800,000
39	D02-A-095 (継2)	屋久島におけるサルとヒトのコンフリクトと自立型保全システムの提案 森野真理　京都大学大学院工学研究科　院生　35歳	1,200,000
40	D02-A-134 (マレーシア)	マレーシアにおける大規模開発と原住民の権利――バクンダム建設計画の事例より チョイ・イー・ケョン　慶応大学経済学研究科　院生　45歳	1,290,000
41	D02-A-144	バングラデシュの水環境と人の暮らし――地下水砒素汚染問題の地域性をさぐる 高橋麻子　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科　院生　30歳	1,500,000
42	D02-A-348	サハラ南縁地域における沙漠化の人類学的研究――チャド湖南岸地域を中心として 石山 俊　名古屋大学大学院文学研究科　院生　36歳	1,500,000
43	D02-A-369	絶滅が危惧される野生イネの自生地保全――ラオスにおける住民参加による持続的共存のために 黒田洋輔　京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科　院生　26歳	1,250,000
		小計(研究助成A)　43件	**57,690,000**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト(URL　http://www.toyotafound.or.jp/)をご参照下さい。

I-2 研究助成B［共同研究］

◎助成対象一覧
助成番号下の（継X）は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円) (助成実施期間)
		課題1 多様な諸文化の相互作用：グローバル、リージョナル、ローカル	
44	D02-B1-003	台湾における道教寺廟建造物装飾彩色の技法画材調査と保存修復方法に関する研究――台南市の興済宮と王家宗祠の装飾彩色を研究対象として 山内 章　(財)元興寺文化財研究所文物修復研究室　室長　43歳　ほか16名	8,000,000 (2年)
45	D02-B1-040	台湾原住民文化運動――多文化社会を目指す原住民作家の創作と評論 下村作次郎　天理大学国際文化学部　教授　52歳　ほか10名	4,000,000 (2年)
46	D02-B1-059	モンゴル帝国の成立過程に関する考古学的研究 白石典之　新潟大学人文学部　助教授　38歳　ほか9名	9,000,000 (2年)
47	D02-B1-075 (朝鮮)	20世紀の朝鮮半島における軍隊と性暴力 金 栄　ルポライター　42歳　ほか6名	8,000,000 (2年)
48	D02-B1-100	国立療養所におけるハンセン病元患者の生活世界に関する文化人類学的研究――ジェンダーの視点から 加藤尚子　国際医療福祉大学医療福祉学部医療経営管理学科　専任講師　38歳　ほか1名	2,400,000 (2年)
49	D02-B1-110 (中国)	1920年代中国西部辺境における民族紛争 陳 慶英　中国蔵学研究中心歴史研究所　所長　60歳　ほか1名	2,900,000 (2年)
50	D02-B1-135	アジアの屋台 萩島 哲　九州大学大学院人間環境学研究院　教授　60歳　ほか12名	6,100,000 (2年)
51	D02-B1-153 (タイ)	タイ法廷での「伝統的共同体の権利」条項の適用をどのように促すか ピシェッ・マオラノン　タイ国人権委員会人権教育小委員会　小委員会委員　53歳　ほか15名	4,000,000 (2年)
52	D02-B1-158 (継2) (韓国)	日本植民地主義と東アジア人類学――韓国と台湾の視野から 全 京秀　国立ソウル大学校人類学科　教授　53歳　ほか2名	6,300,000 (2年)
53	D02-B1-159 (韓国)	植民地韓国における「帝国」の日常生活支配 孔 提郁　尚志大学校人文社会科学大学教養科　副教授　45歳　ほか8名	4,500,000 (2年)

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円) (助成実施期間)
		課題2 社会システムの改革：市民社会の発展をめざして	
54	D02-B2-006	市民社会が構想する北東アジア地域安全保障の枠組み 梅林宏道　ピースデポ　代表　64歳　ほか11名	9,000,000 (2年)
55	D02-B2-027	市民の憲法事典の編さん 五十嵐敬喜　法政大学法学部　教授　58歳　ほか11名	6,000,000
56	D02-B2-029	障害者の消費生活トラブル解決へ向けて 名川 勝　筑波大学心身障害学系　講師　38歳　ほか7名	5,000,000 (2年)
57	D02-B2-033	多元的な記憶をどう伝えるか——近代／ポスト近代の戦争と災害後の モニュメント・記録・語りの文化史的研究とその社会化のためのミュージアム構想 寺田匡宏　国立歴史民俗博物館　COE研究員　31歳　ほか9名	7,000,000 (2年)
58	D02-B2-046	東アジア・東南アジアにおける国際テロ／国際組織犯罪対策の比較研究—— 人権と人間安全保障の観点から 武者小路公秀　中部大学中部高等学術研究所　所長　72歳　ほか17名	5,000,000
59	D02-B2-062	市民向けPRTR(有害物質排出移動登録)情報公開ウェブサイトの創設手法の検討と 海外市民サイトとのネットワーク化の可能性の研究—— 市民参加による有害化学物質削減に向けて 村田幸雄　(財)世界自然保護基金ジャパン　シニア・オフィサー　54歳　ほか9名	2,000,000
60	D02-B2-116 (韓国)	韓国における民主主義体制への移行と軍事主義の解体に関する予備研究 韓 洪九　聖公会大学校教養学部　学部長　42歳　ほか8名	5,000,000
61	D02-B2-134 (韓国)	中国東北地方の女性難民に関する基礎的研究 白 永玉　明知大学校法政大学北韓学科　教授　54歳　ほか6名	3,600,000
62	D02-B2-147	100円ショップ研究——グローバル経済における日本とアジア 堀 芳枝　恵泉女学園大学　専任講師　34歳　ほか9名	2,400,000
		課題3 これからの地球環境と人間生存の可能性	
63	D02-B3-008	南南協力における効果的な技術移転方法の研究—— 持続的地域開発に役立つアグロ・エコシステム手法のザンビアへの導入を事例として 門平睦代　名古屋大学農学国際教育協力研究センター　助教授　46歳　ほか4名	2,600,000
64	D02-B3-016 (中国)	四川省東部における農民層の貧困撲滅と環境保全を目的とするアグロフォレストリーの開発 田 光龍　中国科学院成都山地災害・環境研究所　研究員　39歳　ほか7名	2,900,000 (2年)
65	D02-B3-022 (継3) (ヴェトナム)	ベトナムの未開発植物遺伝資源の探索と調査研究—— 特に山岳民族が利用する植物遺伝資源の調査研究 グエン・ヴァン・ケー　国立ホーチミン大学農林学部　上級講師(助教授)　52歳　ほか5名	1,900,000
66	D02-B3-034	カザフスタン共和国セミパラチンスクにおける被曝実態調査研究 川野徳幸　広島大学原爆放射線医学研究所　助手　36歳　ほか6名	3,500,000 (2年)

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円) (助成実施期間)
67	D02-B3-055 (継2)	西アフリカ半乾燥熱帯圏の農牧混交地域における「等身大」の沙漠化研究―― 地域民により実践可能な共生的資源環境利用システムの構築を目指して 田中 樹　京都大学地球環境大学院　助教授　41歳　ほか7名	3,300,000
68	D02-B3-080 (継2)	中国内蒙古河套平野における砒素中毒症と塩害の環境科学的手法による研究―― 適正な灌漑用水の利用と安全な飲料用地下水の確保のために 高野武男　新潟大学法学部　非常勤講師　69歳　ほか13名	3,000,000 (2年)
69	D02-B3-087	南西諸島における赤土流出防止のための石垣島農地での不耕起栽培法の実証研究 干川 明　石垣島ほしかわ農場　場長　54歳　ほか3名	5,000,000 (2年)
70	D02-B3-123	ベトナム・メコンデルタにおける環境共生型エビ養殖に対する科学的評価 髙橋 徹　(株)みなまた環境テクノセンター　主任研究員　47歳　ほか10名	4,000,000
71	D02-B3-132	ダム等の河川構築物が下流河川や海域環境に与える影響の評価―― 熊本県の球磨川水系を事例として 村上哲生　名古屋女子大学家政学部生活環境学科　助教授　51歳　ほか9名	3,100,000
72	D02-B3-156	循環型社会を支える社会的仕組みの研究――沖縄島嶼社会における協議システムへの注目 崎山正美　(有)風水舎　取締役　52歳　ほか8名	4,300,000 (2年)
73	D02-B3-159	カンボジアにおける移行期経済が貧困削減に与える影響――土地問題に焦点をあてた事例研究 米倉雪子　日本国際ボランティアセンター　カンボジア事務所　代表　41歳　ほか5名	4,500,000 (2年)
74	D02-B3-164 (中国)	ファイトレメディエーションを活用した富栄養化水域の浄化に関する研究―― 太湖水系における農業由来排水の処理モデルおよびアオコ発生抑制モデルの構築 宋 祥甫　上海農業科学研究院　教授　46歳　ほか20名	2,600,000 (2年)
75	D02-B3-165 (ヴェトナム)	メコンデルタにおける農業環境と健康改善へ向けた地元コミュニティによる イニシアティブへの実践的な支援 トン・タット・カイ　職業健康・環境センター　所長　48歳　ほか13名	7,000,000 (2年)
76	D02-B3-185	コンソーシアム形成による再生可能エネルギー事業の実行可能性に関する研究 大島堅一　立命館大学国際関係学部　助教授　35歳　ほか5名	3,800,000 (2年)
	課題4 市民社会の時代の科学・技術		
77	D02-B3-136 (継2)	負の遺産としての公害・水俣病事件と水俣地域市民社会の再生に関する総合的研究―― 水俣学の構築・発展に向けて 原田正純　熊本学園大学社会福祉学部　教授　67歳　ほか11名	3,500,000 (2年)
		小計(研究助成B)　34件	**155,200,000**
		研究助成合計　77件	**212,890,000**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト(URL　http://www.toyotafound.or.jp/)をご参照下さい。

I-3 研究助成特定課題 | 近代化とくらしの再発見

本プログラムの経緯

研究助成特定課題「近代化とくらしの再発見：わたしたちが見つける地域の歴史」は、2002(平成14)年3月理事会において本年度研究助成の特定課題として2005(平成17)年度までの期間限定で実施することが承認されたものである。

このプログラム構想の起点は、2000(平成12)年8月、トヨタ自動車が千数百点におよぶ江戸期の科学技術関連資料を購入し、これを国立科学博物館に寄託して研究に供すると決定したことに遡る。国立科学博物館は、この資料群を「トヨタコレクション」と名づけ、これを契機に同コレクションを中核とした全国規模の資料調査研究を立ち上げることにした。この「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」(通称：江戸のモノづくり)と題する研究は、文部科学省「特定領域研究(A)」の対象として採択され、平成13年度より平成17年度にかけて、数百人の研究者が参加し総額も十数億円という人文系の研究としては空前の規模で実施されることになった。

トヨタ財団ではかねてより、国立科学博物館から江戸のモノづくりプロジェクトの推進に協力の要請を受けており、プログラム・オフィサーが企画面でのアドバイスなども行ってきたが、さらに一歩踏み出して、専門家集団の研究と相補的に、市民参加によって近代化の意味をあらためて問い直すようなプログラムが可能ではないか、との考えから本構想の立案に至ったのである。この背景には、かつて20年近くにわたって財団が実施した「身近な環境を見つめよう」というテーマの市民研究コンクールの実績と経験とがある。

財団事務局では、先の3月理事会での提案に先立って、プログラムの枠組みを詰めることと並行して、関連する専門家の意見を聞き、応募可能なグループがあるかどうかの検討も行った。その結果、新規プログラムであり主旨の浸透には時間もかかるとの判断から、初年度は選考委員等による指名募集とする方針を決めた。指名の基準は、今回の主旨によく合致する研究や活動をこれまでにある程度行っていて、次年度以降の公募に際してのモデルとなりうるグループということである。

理事会での事業計画承認後ただちに、これまでアドバイスをいただいた専門家を選考委員に委嘱し、3月から5月にかけて全国8箇所のグループにインタビューを行った。うち1箇所のみは電話によるものだが、他はすべて財団事務局や選考委員が直接現地に足を運び、複数のメンバーに主旨説明と参加の呼びかけを行った。

選考の経過

選考委員会は、5月30日に国立科学博物館の会議室にて行われた。おりしもトヨタコレクションの内覧会が同館講堂で行われており、委員も全員これを見学してからの会議となった。

応募は先の8グループすべてからあり、計画案をめぐっての委員からの注文などが、各グループにあらかじめ伝えられていたこともあって、応募計画内容はいずれも理事会に推薦するにふさわしいものとして承認された。

選考委員選後評

■青柳正規［東京大学文学部教授］

研究助成特定課題「近代化とくらしの再発見：わたしたちが見つける地域の歴史」の助成目的には次の3点が考えられる。第1点は、大小さまざまな地域における知的基盤の強化と多元価値社会の実現のためには研究に関与する集団の拡大と多様化が重要であり、専門研究者以外の人々が研究に参画できる環境を整備する必要がある。第2点は、人的、社会的、文化的に十分な活用をみていない部分を資源化し、それらの資源を共有することによりさらに充実した近未来の社会を実現する必要がある。そして第3点としては、研究活動の継続化の確立である。本特定課題は国立科学博物館を中核とする文部科学省科学研究費「特定領域研究」の「我が国の科学技術黎明期資料の体系化に関する調査・研究」と相互に補完する関係を樹立しようとしており、とくに専門研究者が組織制度を基盤として研究の継続性を担保しているのに対して、本特定課題は地域がもつ社会的、文化的継続性を研究推進に活用し、結果として重厚な構造性をもつ研究活動を実現しようとするものである。

このような目的意識から選考が行われ、後記のような8件が選ばれたわけである。8件の研究グループはいずれも市民による研究を特徴としており、それぞれの課題は文書資料調査、技術再現、画像資料整理、モノ資料調査など多岐にわたり、本特定課題の目的に合致するものと選考委員会では全員一致で理事会に推薦することになった。この審査の過程で浮上したいくつかの課題は本特定課題の輪郭をより明らかにすると考えられるので以下に記すこととする。

一つは、研究結果もしくは成果の発表をいかにするかということである。通常の研究助成を受けた研究であれば研究報告とともにその成果が学会誌等に論文として公表される。学的貢献を目的とするのであるからいかなる部分で貢献したのかを論文という形で明らかにすることは当然の営為である。ただし市民研究の場合、かならずしも学術論文としての成果公表が唯一の発表手段ではないのではという考えで選考委員会は一致した。むしろ、研究の推進・活動自体に意義がある研究グループも存在するのであるから、その活動の記録自体が研究成果となる場合もある。活動の記録とはいつ、どこで、誰が、どのような研究内容の活動を行ったかを書き記したり、ヴィデオに撮影したりすることである。もしヴィデオに記録する場合は、それをどのような形で公表するかという問題はなお未解決であるが、なんらかのメディアを用いて公表することになれば、その研究グループの成果としてだけでなく、市民研究のあり方をひろく社会に広報することにもなり、選考委員会でも引き続き検討していきたいと考えている。

もう一点は、市民研究グループと専門研究者との関係である。どちらの研究グループであっても、研究活動及び研究結果を、その実行・作成過程においてつねに類似もしくは先行する研究と比較し相対化する必要がある。この意識もしくは行為が欠如すると、独善的あるいは排他的活動となる危険が生じる。そのような危険を防ぐには、市民研究活動に理解をもつ優れた専門研究者のアドヴァイザー的関与があることが望ましい場合もある。このこともまた、選考委員会でさらに検討する必要があろう。

■朝岡康二［国立歴史民俗博物館教授］

民間の意欲的な研究グループがおこなう地域の文化遺産の調査と保存活動に、トヨタ財団が助成をするという話を聞いて大いに興味を持った。しかも、その選考に参加させていただけることになって誠に光栄であった。

応募資料を拝見しながら、まだ若かった高度成長経済が開始した頃のことを思い出した。当時、地域の文化遺産・産業遺産を調査・保存して、その文化を継承しようとする活動が多方面から生れていた。伝承的な生活文化の再認識が活発に語られて、大都市から発せられるものではない、地域に根ざした自らの文化の発掘と再構築が各地で模索されていた。私などもこの潮流に影響を受けて、生業を介した地域的な人々の交流に関心を持って、村々に点在する鍛冶屋さんを訪ねては話を聞いて歩いたりしたものである。確かにそこから得られたものは、制度化した大学の学問からは獲得しがたい貴重なものばかり

であった。しかしながら、今から思えば当時の活動は、以後その成果を十分に生かしきれなかった部分も多く、次世代に受け継いでいくという点でも、必ずしも成功しなかったように思われる。それは、高度成長経済下の一極集中の文化圧力に抗しきれなかったためであろうが、同時に、成果の上澄みを観光産業やマスメディアに掬い取られていく中で、活動そのものが形骸化し、本来の活力を失ってしまったからであるとも思われる。

この時期を通して、村や町の生活を取り巻く諸状況は激変したが、その結果は本来的に地域が持つ多様性を限りなく薄めていく方向に働き、地域社会はその将来に向かって固有の展望を描くことができないまま、いたずらに経済に振り回されてきたといってよいであろう。あれから時代は一回りして、再び地域社会の正当な復活を目指す時代がやってきたのであろうか。人々は、再び自らの手で自己の文化を再構築する手掛かりを探り始めたのであろうか。

このプロジェクトに私が持った主な関心と期待は、この点にあった。この観点から集まった応募資料を拝見すると、それぞれしっかりした意識に支えられており、十分に発展する可能性を持つと感じられた。新しい環境が生まれつつあるのであろう。もちろん、すでに実績があるものばかりではなく、たとえ実績がある場合にも、それを乗り越える道筋がしっかり定まっているものばかりとはいえないかもしれない。その先に手作りの学問の困難さが横たわっていることも、また確かなのである。

しかし、ここでもっとも重要であると思われることは、学問・研究を通じて地域社会に人的ネットワークを構築していこうとする意欲である。人々が地域で取り組む研究は一過性のものではなく、世代間で継承されつつ、新しい展望を生み出していくべきものである。そして、こうした学問・研究のネットワークが地域社会に埋め込まれることによって、地域の正当な自己認識もまた得られるものと思われる。このような観点からみると、ここで個別の応募に触れる余裕はないが、いずれもこの応募を基点として、今後新たなネットワークを生み出していく可能性を持っているといえる。また、専門的研究者との連携・協力も準備されており、その協業も、将来の研究のあり方を見据えた重要な実験であると思われる。

来年度以降は、さらに応募が増えて激戦になるであろう。それによって、地域文化の研究が新たな段階を生み出すことが期待される。日本の地域文化は民衆が自らの手で築き上げてきた伝統を持っているはずだからである。

鈴木一義［独立行政法人国立科学博物館　主任研究官］

市民活動として、地域における文化や歴史を見直そうという動きは、従来から全国的に進められている。私もいくつかの活動に協力した経験があるが、活動自体にも、また自分自身の関わり方についても、疑問や限界を覚えることが少なからずあった。

第一に、私のような市民研究のアドバイザーや選考委員として協力を求められる研究者が、彼らの期待に果たして応えているのか、どうかである。確かに、専門知識を持つ研究者として、市民研究への一般的、総論的なアドバイスはできる。しかし市民研究による地域の文化や歴史の見直しは、体裁の整った外部の研究者によるものよりも、地元に育った人たちが中心になるが故に、雑然としていても具体的で、部外者には気付きえない部分がある。実はこの部分を掘り下げてこそ、市民研究がもつ大きな価値につながるのであるが、設定された数回の委員会や調査を一緒にお付き合いする程度では、よほど双方の関係がうまく作れていなければ、宝は埋もれたままになってしまう。

理想は、自分自身もしくは他の研究者が、その市民活動に連携、バックアップできるような研究を同時に行うか、もしくは、研究者が研究対象として何回も調査に行くような地域で、一緒に連携できる市民活動を立ち上げることであろう。どちらかが可能なら双方にメリットが大きいはずである。

第二に、いかに市民研究と言えども、独りよがりのものではなく、相対的な評価が必要であろう。この相対的評価は、研究者らによるアドバイスも一つの方法であろうが、基本的には自らが評価の相対基準を持つようになることが重要である。研究者は、自分自身の研究の評価基準を論文や学会などとの関係、交流において形作っていく。そのような、ある意味シビアな交流場所が市民活動には存在しない〔筆者が気づかないでいるだけかもしれないが、あるならば喜ばしいことである〕。これだけ、社会で市民研究が広がりを見せている中、なぜ市民研究の交流の場を作りえないのであろうか。生涯学習や社会人教育などが一般的な状況になってきた現代において、専門家と素人の様な2極対立的なものではなく、多重構造的な

交流の場が必要となってきている。

第三に、市民活動としての研究は、自主自発的であり、かつ各地域で持続されてこそ意味があると思うのだが、そのような市民活動の体制を実現することが非常に難しいと感じる。地域における市民活動は、ボランティア主体であれ、行政主体であれ、その市民研究の後継者を育てていく視点に欠けていることが多い。それは市民活動の多くが、地元に密着したものであるがゆえに、誰でもが参加、理解し得る地域全体を対象とした総論的なものではなく、個々の事象を問題とする各論的な研究であることによろう。それらは継続的ではあっても同好会的な雰囲気を持ち、広く市民や次の世代である青少年らへのアピールに欠けるのである。

同様の限界や疑問を持つ研究者や市民研究者は案外多く、語り合うことも度々であった。これらの問題に研究者はもっと深く関与すべきではないか。自身の研究分野や後継者達のためにもである。実は研究者側からの地域文化、市民へのアプローチは、平成13年度からスタートした文部科学省科学研究費補助金特定領域研究「江戸のモノづくり(HP:http://www.edomono.kahaku.go.jp/)」により、全国の数百人の研究者が参加して動き始めている。トヨタ財団の助成は、対する市民側からの動きを進めるものであり、研究者と市民との新たな双方向の関係を作ることに意義あるものとなろう。

今回選考審査には、研究者が予め関わり、上記の問題に呼応した市民研究が応募しているが、まだその認識は課題により様々であった。初めての試みであるがゆえに、選考委員の我々にも正解はない。問題解決の形の一つが、このトヨタ財団の助成から生まれれば、選考委員として望外の喜びである。今年を始めとして今後、日本各地で行われるであろう研究者と市民の研究と交流が、新たな地域の歴史や日本文化の再発見につながる事を願う。

■真島俊一[株式会社TEM研究所　代表取締役]

助成の対象となった8件の研究題目とその内容はユニークな視点と切り口に充ちていて、素晴らしい。どのグループも巨大なテーマを掲げていて(巨大な作業になってしまうものも含むが)、1，2年の研究課題で終わるはずがないテーマである。従って助成期間に良好なるトレーニングができれば、将来にわたっての問題意識がしぼり込め、かつ実践活動がより鮮明になる…といった可能性のあるグループが集まっていた。この事からも楽しい選考であった。

本年度の研究グループの共通性は、ある地域資料を対象に以前から活動をしていて、今後有効と思われる問題点がある程度、浮上している段階で応募していることである。このため作業の行程に無理がなく、メンバーの人選も手堅い状態を設定している等々の内容に好感がもてた。

研究題目から見ると産業史やその技術史的な傾向をもつもの5件、生活文化つまり暮らしの視点をもつもの3件となるが、これは対象となる素材の問題であろう。今後の活動によってはテーマが産業と生活文化、両者にわたる可能性を秘めているグループがでてくると思われる。中身の濃くなることを期待してこれも可として見ていきたい。

活動の展開から見ると市民や小、中学生の参加型をとるグループがあり、「新しい視点や知的好奇心を育成したい…」としたり、あるいは、活動自体を公開性の高い、参加型に近いものにしている場合もある。

こうした方針は内容を拡大していくものであるため大変な作業量が発生し収束がつかなくなるグループも出てくるはずである。これは私見であるが、まずは8グループが交流するとよいのかも知れない。できるだけ、始めや中間段階に行うとよい。経過報告会のような会合ができれば各グループに共通する問題が明確になり、以後の収束、整理ができる切っ掛けとなるのではないだろうか。

何れにしても各チームの仕事は、財団のテーマである「わたしたちが見つける地域の歴史」であることには変わりがない。願わくは研究対象そのものを語らせることに、各チームとも成功してほしい。しかも漏らさず発見し浮上させ、地域の歴史はまだまだ未発見の物件が山の様にあることを知らせて欲しい。

◎助成対象一覧

助成番号下の（継X）は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円)
1	D02-H-001	東北像の再構築――文書・資料による地域の歴史の掘り起こし	500,000
	（山形・宮城）	佐藤大介　東北大学大学院文学研究科　博士後期課程　28歳　ほか13名	
2	D02-H-002	国友一貫斎の科学性についての研究	500,000
	（滋賀）	廣瀬一實　「国友一貫斎」科学技術研究会　会長　61歳　ほか15名	
3	D02-H-003	絵葉書にみる近代佐賀の風景	500,000
	（佐賀）	本多美穂　佐賀県教育庁文化課　主査　38歳　ほか4名	
4	D02-H-004	近代における石見銀山の展開と大森町――「モノ」による景観の復元を中心として	500,000
	（島根）	河村政経　石見銀山世界遺産をめざす会　会長　68歳　ほか14名	
5	D02-H-005	幕末長州における科学・産業技術史の研究――日本近代化への役割	500,000
	（山口）	樹下明紀　幕末長州科学技術史研究会　会長　62歳　ほか22名	
6	D02-H-006	段々畑と海に生きた人々――愛媛県宇和島市遊子住民の仕事と暮らしの歴史的研究	500,000
	（愛媛）	古谷直康　近代史文庫　主事　68歳　ほか10名	
7	D02-H-007	布の一生と生活の近代化――雑巾やボロからみた佐渡の衣生活とその伝承活動について	500,000
	（新潟）	佐藤利夫　佐渡生活伝承研究会　佐渡研究家　70歳　ほか10名	
8	D02-H-008	みんなの集成館―― わたしたちが見つけ、私たちが伝える地域の歴史「島津斉彬と集成館事業」	500,000
	（鹿児島）	寺尾美保　尚古集成館　学芸員　36歳　ほか5名	
		合計　8件	**4,000,000**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト（URL　http://www.toyotafound.or.jp/ ）をご参照下さい。

II

市民社会プログラム

Ⅱ-0 市民社会プログラムの概要と活動結果

市民社会プログラムについて

このプログラムは、二つの助成プログラムから構成されている。公募で行う「市民活動助成」と非公募・計画型で実施する「市民社会プロジェクト助成」である。

「市民活動助成」は、地域や社会全体に関わるさまざまな問題の解決へ向け、積極的な取り組みを行っている市民活動団体やNPO(民間非営利組織)のエンパワーを目的としている。

一方、「市民社会プロジェクト助成」は、市民活動団体と専門家との協働体制によって行われる調査・研究、及びその成果にもとづく社会実験的な試みを一定期間継続的に支援していくことを目的としている。

こうした取り組みを通して、市民社会の構築に貢献していくことを目標としている。

市民活動助成

この助成については、基本テーマ「市民&NPO～新しい公共の創造へ向けて～」のもと、新しい公共形成の担い手としての市民活動団体やNPO(民間非営利組織)によって取り組まれる社会的波及性の高い計画や試みに対する助成を行うことを趣旨としている。

助成の対象としては以下のような内容を重視している。

(1)持続可能な環境の保全と生態系の維持に関する新たな取り組み

(2)新たなコミュニティの構築に向けた取り組み

(3)障害者や高齢者の自立に向けた新たな取り組み

(4)社会的に弱い立場に置かれている人々の支援や擁護に向けた試み

(5)子どもを取り巻くさまざまな環境や制度の改善に向けた試み

(6)海外への支援や協力の体験を、日本の地域や社会に生かそうとする試み

(7)市民活動全般の支援や推進に向けた実践的・具体的な試み

(8)その他、地域や個人に関わる問題や課題を草の根の視点から問い直そうとする試み

2002年10月1日から11月20日までの公募の結果、539件の応募があった。

これらについては、2003年1月から2月にかけて「市民活動助成選考委員会」(委員長・藤田和芳、他7名)にて選考を行い、3月中旬開催の第101回理事会にて、24件、3,580万円の助成対象を決定した。助成期間は2003年4月より1年間である。

市民社会プロジェクト助成

この助成は、市民活動の一層の質的充実を目標に、「市民活動助成」の発展形態として1996年度より実施している。ここでは特に、社会的な問題や課題の克服に向けた市民主体の提言活動の推進をめざし、十分な調査・研究等、専門性を包含した試みを支援していくことを狙いとしている。同時に、プロジェクトを通して、市民活動団体の力量形成に貢献していくことも併せて目的としている。

当プログラムの運営は非公募・計画型のため、これまでの市民活動助成等の対象の中から、特に社会的な意義が大きく、継続的に支援していく必要度の高いプロジェクトに焦点を当て、財団と実施団体双方の協議に基づき計画を練り上げ、助成を行っている。

今年度は、4件、2,035万円の助成対象を決定した。

なお、助成対象の選定に際しては、財団事務局での検討を踏まえ市民活動助成選考委員長等、関係者からの助言・協力も得て、理事会にて決定することとしている。

Ⅱ-1 市民活動助成

選考を終えて | 藤田和芳［選考委員長］

応募の概要と特徴

本年度の市民活動助成については、公募(2002年10月1日～11月20日)の結果、539件の応募が寄せられた。昨年度(644件)と比較すると約100件の減少となったが、これは、応募団体の活動実績が2年を越えることを応募の条件としたこと等によるかもしれない。とは言え、相変わらず多くの応募が寄せられるのは、市民活動やNPOにとって、本来の力量を十分に発揮していくための自由度の高い資金が依然として不足しているという現実があるためだと思われる。

応募団体の組織形態を見ると、特定非営利活動法人(NPO法人)からの応募(法人格申請中のものも含めて)が305件(昨年度254件)と全体の約6割にもなる。NPO法人の数が10,000件を超える状況下、こうした増加傾向は当面続くものと予想される。応募団体の活動領域を見ると、「社会福祉」(62件)、「子ども・教育」(66件)、「環境保護・エコロジー」(59件)の3つの分野が多い。一方で、複数の分野にまたがって活動している団体が193件と全体の約35%にもなっている。対象とする社会的問題や課題が、より一層複雑化や錯綜化の様相を深めつつある昨今、活動自体もまた、社会的な広がりが求められ、複合的なものとならざるを得ない。

また、活動年数については、3年以上10年以下という団体が全体の半数以上を占めている。さらに、応募団体を所在地別に見てみると、全体の応募件数が減少した中、中部(70件)、北陸(27件)、九州(64件)の地域において昨年度比増となった。NPO法の普及などに伴い、市民活動が全国的に活発化の度合いを高めている様子が窺える。

なお、応募のあったテーマについては、「社会福祉」(110件)、「子ども・教育」(88件)、「環境、エコロジー」(98件)に関するものが多かった。このような傾向は、ここ数年続いている。より具体的に見てみると「高齢者のケア」、「障害者の支援」、「育児・子育て」、「環境教育」、「地域おこし」といったテーマが多い。

選考について

さて、選考については、2002年末から2003年1月下旬にかけ、各委員には個別の評価作業を実施していただいた。委員の方々には、依然として多くの応募数であったため、書類の読み込みも含めて、かなりハードな評価作業をお願いすることとなった。基本的には書面による評価のみをお願いしていたのだが、中には、独自に関係団体のWebサイトにアクセスするなど、熱心に情報収集を行って評価に臨む委員もいた。

この助成は、基本テーマ「市民＆NPO～新しい公共の創造へ向けて～」のもと、様々な社会的問題の解決へ向けて積極的な取り組みを行っている市民活動団体やNPOのエンパワメントを目的としている。特に、本年度からは、市民による政策提言活動や新たな社会的起業に向けた取り組みに関する計画に重点を置くこととした。それでも、実際に寄せられた応募は、テーマや内容が相当多岐にわたっているため、評価を行うに際しては、幅広い知識や情報等が必要とされ、委員にとってはかなり大変な作業であったと思う。

選考委員会では、各委員からの評価結果を踏まえ、推薦のあった全ての計画内容一つひとつにつき、公正かつ丁寧な審議を長時間にわたって行った。また、その過程では、特に類似性のある計画については、比較なども含めた慎重な検討も行った。

なお助成金額についてだが、本年度より、プロジェクト1件あたりの上限を300万円(昨年度までは200万円)とした。これは、NPO法人など、市民活動を行う団体や組織の規模が大きくなりつつある中、活動や事業に要する資金ニーズもまた増加していることに対応した措置である。しかし委員会では、応募金額に対して、大幅な減額も含めたかなり厳しいコメントや注文も委員より相次いで出された。結果として、別紙のとおり24件3,580万円を本年度の助成対象として採択した。

採択された計画について

今回採択された計画について、以下に概観してみたい。

先ず、いまだ社会的な対応が十分に行き届いていない課題に果敢に取り組もうとするプロジェクトが7件あった。「DV被害者の社会復帰」、「路上生活者の就労問題」、「薬物依存者の社会復帰」、「外国人留学生の居住問題」、「芸術家等の交流拠点の確保」、「被拘禁者の人権問題」、「高次脳機能障害者の社会復帰」等である。これらについては、問題解決を目指した具体的な活動を通して、説得力のある提言につながることを期待したい。

また、「新学習指導要領」の施策として「総合的な学習の時間」が導入されているが、そうした流れに関連する計画が2件あった。それぞれ「アート」や「環境問題(水俣)」を通して「多様な価値観を認めあえる社会」を実現していきたいとの思いが背景にある。"いじめ"や"学級崩壊"が問題視されている昨今、これらの実践的な試みが、社会へ「一石」を投ずるものとなることを願いたい。

次に、問題の原因やその構造的側面を明らかにすることを目的としたプロジェクトが7件あった。テーマは、「生態系保護」、「福祉と医療情報」、「DV防止法の見直し」、「障害者のためのクリアリングハウス」、「子どもの健康と化学物質」、「アディクション・クリアリングハウス」、「沖縄米軍基地周辺における環境問題」と多岐にわたる。いずれも、市民主導による情報の収集および整備を通して、社会的な提言につなげていこうとする内容である。

さらに、調査、実践にもとづき市民の側から代替案を提示しようという取り組みが3件あった。「里海づくり」、「緑のダム」そして「自然エネルギー」といった先駆的なテーマに沿った夢のある実践を伴う試みであり、今後の活動の広がりが望まれる。

なお、長い年月にわたって継続して取り組まれているテーマも2件あった。「琵琶湖の環境汚染」、そして「市民社会におけるネットワーキング」である。いずれも問題や課題が浮上してから20年近い年数が経過しているが、今日でもなお新しく、重要なテーマであり、市民の視点に立った有意義な成果を待ちたい。

最後に、地域の特色を生かしたコミュニティづくりに関わる計画が3件あった。「鉄路再現事業」、「自然体験ガイドラインの作成」、そして「震災後の復興まちづくり」である。いずれも、活動地域に固有な資源、経験を活かした地域密着型の活動であり、社会的な波及効果を期待したい。

以上の採択候補については、総じて「市民性」、「政策提言性」、そして「民間支援の必要性」といった視点で高い評価を得ている。

今回採択されなかった応募計画の中には、アイデアの先駆性や斬新性がとぼしい、テーマの先見性等は評価されながらも計画内容の具体性や詳細さに欠ける、団体や組織の維持のみが目的となってしまっている、記載内容に比べて実現性が疑問視される、等の不十分な点も多かった。今後は、助成の趣旨も十分踏まえ、より具体性を伴った説得力のある計画としてご応募いただくよう希望したい。

◎助成対象一覧

助成番号下の(継X)は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円) (活動年数)
1	D02-K-032	DV被害者及び同伴子の一時保護事業	1,300,000
	(広島)	土居達雄　特定非営利活動法人　ふぁみりぃ　理事長	(3年)
2	D02-K-047	路上生活者の就労を支援するためのプロジェクト	1,700,000
	(東京)	笠井和明　新宿野宿労働者の生活・就労保障を求める連絡会議　代表	(9年)
3	D02-K-064	関東周辺におけるウミガメ類のストランディング(漂着)の状況把握と ストランディング情報ネットワークの構築	1,500,000
	(神奈川)	菅沼弘行　特定非営利活動法人　エバーラスティング・ネイチャー　会長	(4年)
4	D02-K-077	市民の福祉と医療の情報センター設立のための準備プロジェクト	2,000,000
	(埼玉)	上田 寧　市民の医療ネットワークさいたま　代表	(11年)
5	D02-K-086	DV防止法の施行3年後見直しに向けた実態調査と提言活動	2,000,000
	(埼玉)	波田あい子　全国女性シェルターネット　代表	(5年)
6	D02-K-113	琵琶湖淀川水系の環境汚染の将来予測——20年後の追跡調査をもとにして	2,000,000
	(大阪)	石田紀郎　琵琶湖淀川汚染総合調査団　調査団団長	(9年)
7	D02-K-130	日本におけるアーティスト・イン・レジデンスの事業の展開	1,500,000
	(東京)	小澤有子　特定非営利活動法人　アーツイニシアティヴトウキョウ　理事長	(3年)
8	D02-K-137	『私にありがとう——女性の薬物依存症者への回復者からのメッセージ』に関する出版	900,000
	(東京)	上岡陽江　特定非営利活動法人　ダルク女性ハウス　事務局長	(12年)
9	D02-K-145	外国人留学生のための保証人ボランティア制度を確立するためのプロジェクト	1,000,000
	(東京)	高野文生　特定非営利活動法人　東京エイリアンアイズ　代表理事	(4年)
10	D02-K-171	第一回セルフヘルプ・クリアリングハウス全国大会の開催	1,000,000
	(栃木)	岡田正彦　とちぎセルフヘルプ情報支援センター　ボランティアスタッフ	(3年)
11	D02-K-256	国鉄士幌線跡　鉄路再現事業のための調査	1,000,000
	(北海道)	坂本徳寧　特定非営利活動法人　ひがし大雪アーチ橋友の会　会長・理事	(6年)
12	D02-K-273	21世紀にふさわしい情報社会の構築に向けた市民主体のネットワーキングの実現	3,000,000
	(東京)	浜田忠久　特定非営利活動法人　市民コンピュータコミュニケーション研究会　代表理事	(10年)
13	D02-K-279 (継2)	アーティストと小学校教員の協働による 総合的学習のカリキュラムづくり・授業実践とNPOによる新しい教員研修制度の確立	2,800,000
	(東京)	堤 康彦　特定非営利活動法人　芸術家と子どもたち　理事長	(4年)

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円) (活動年数)
14	D02-K-332	「水俣」の事実を知る作業を通じ、 子どもたちと環境・いのち・希望を探る出前授業活動	800,000
	(神奈川)	田嶋いづみ　「水俣」を子どもたちに伝えるネットワーク　代表	(4年)
15	D02-K-334	刑事被拘禁者(いわゆる「受刑者」など)のための人権相談事業の実施	1,200,000
	(東京)	村井敏邦　特定非営利活動法人　監獄人権センター　代表理事	(8年)
16	D02-K-360	富士山自然体験活動ガイドラインの作成	800,000
	(山梨)	広瀬敏通　特定非営利活動法人　富士山自然体験活動推進協議会　代表理事	(6年)
17	D02-K-453	密集市街地における激甚災害復興の一手法の調査研究と空地・ 施設の有効活用に向けた市民ファンドとまちづくり組織の調査研究	2,500,000
	(兵庫)	上田諭信　プラザ5運営委員会　代表	(4年)
18	D02-K-479	子どもの健康を化学物質から守るための施策調査および提言活動	1,500,000
	(東京)	藤原寿和　化学物質問題市民研究会　代表	(6年)
19	D02-K-490	高知県西南端の島・柏島をモデルにした持続可能な「里海」づくり	1,200,000
	(高知)	神田 優　特定非営利活動法人　黒潮実感センター　センター長	(5年)
20	D02-K-494	高次脳機能障害者のための社会復帰支援プロジェクト	1,200,000
	(広島)	馬屋原誠司　脳外傷友の会「シェイキング・ハンズ」　相談役顧問	(4年)
21	D02-K-509	森林の治水機能の向上による「緑のダム」効果―― 吉野川流域における治水ダム(可動堰)への代替案としての森林整備	1,000,000
	(徳島)	姫野雅義　特定非営利活動法人　吉野川みんなの会　代表理事	(3年)
22	D02-K-512 (継2)	「持続可能な北海道」のエネルギー地域社会に向けた市民参加による政策の具体化	1,500,000
	(北海道)	杉山さかゑ　特定非営利活動法人　北海道グリーンファンド　理事長	(4年)
23	D02-K-520	「AKKアディクション情報サポートセンター」事業の実施	1,200,000
	(東京)	米山奈奈子　アディクション問題を考える会　代表	(17年)
24	D02-K-528	米軍基地周辺において発生している環境問題解決に向けての市民参加によるしくみづくり	1,200,000
	(沖縄)	桜井国俊　沖縄環境ネットワーク　世話人	(6年)
		合計　24件	**35,800,000**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト(URL　http://www.toyotafound.or.jp/)をご参照下さい。

Ⅱ-2 市民社会プロジェクト助成

◎助成対象一覧

助成番号下の(継X)は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円)
1	D02-KC-001 (継3)	日韓の干潟保全を目的とした共同調査とその成果に基づく政策提言(第三年次) 脇 義重　九州琉球湿地ネットワーク　代表　56歳　ほか30名	5,000,000
2	D02-KC-002 (継2)	瀬戸内法の改正に向けた調査と提言(第二年次) 阿部悦子　環瀬戸内海会議　代表　52歳　ほか26名	5,000,000
3	D02-KC-003 (継2)	NPO支援センターの機能強化に向けた人材のキャパシティ・ビルディング(第二年次) 田尻佳史　特定非営利活動法人 日本NPOセンター　事務局長　37歳　ほか7名	5,000,000
4	D02-KC-004	NPOの政策提案力の開発と、NPOの参画を保障する自治体の政策形成システムの提案 小島 聡　特定非営利活動法人 まちづくり情報センターかながわ　理事　40歳	5,350,000
		合計　4件	**20,350,000**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト(URL　http://www.toyotafound.or.jp/)をご参照下さい。

III

東南アジアプログラム

Ⅲ-0 東南アジアプログラムの概要と活動結果

東南アジア国別助成の概要

東南アジア国別助成は、1976年度の開始以来、プログラム当初のごく限られた期間を除いて、対象とする地域を東南アジア諸国に絞っている。助成の分野としては、各地域の「(東南アジアの)現代社会の文化の課題」というテーマのもとに、社会・人文科学分野の研究やその他の文化的プロジェクトに重点をおいている。具体的には、古文書の保存、歴史研究(特に地方史)、考古学研究、口承文化の記録、伝統建築・芸術の記録・保存、言語研究・辞書編纂(特に少数民族言語)、百科事典の編纂、文学研究、近代化と伝統に関する研究などの分野で助成を行っている。

助成対象の選考にあたっては、以下の諸点を満たすようなプロジェクトを重視している。

①東南アジア諸国の人々の発想で、東南アジア諸国の人々によって行われるプロジェクト

②政府や国際機関のプロジェクトよりも、大学や民間機関のプロジェクト

③具体的な効果が期待でき、社会的なインパクトの大きいプロジェクト

申請は一年中受け付けるが、毎年5月20日までに届いた申請書をその年の7月の選考委員会で審査する。審査前、および審査中に財団のプログラム・スタッフが申請者を訪問して調査を行う。さらに本プログラムで助成を受けたプロジェクトの成果を社会に還元するための成果出版や会議開催のための申請書は毎年12月20日まで受付け、審査する。

東南アジア研究
地域交流プログラム(SEASREP)の概要

当プログラムは、東南アジア諸国の人文・社会科学分野の研究者間における相互理解の促進及びネットワークの確立をめざし、ひいては東南アジアを一つの地域として捉えるような東南アジア研究の促進を目的として、国際交流基金アジアセンターと共同で1995年度より開始した。

プログラムは、「地域共同事業」と「カウンシル企画事業」および「人材育成」の3つの柱からなる。

「地域共同事業」は、所属を問わず広く東南アジア人の東南アジア研究者を対象とする。

「カウンシル企画事業」サブ・プログラムは、当プログラムを共同で実施している東南アジア側の研究者から成るSEASREPカウンシルが当プログラムの発展のために企画するプロジェクトへの助成を行う。

「人材育成」は、SEASREPカウンシル事務局がプログラムの運営を実施している。対象者は東南アジアの大学の人文社会科学系の学部および研究所に所属する大学院生及び若手研究者が中心である。その内容は、(1)語学研修助成、および(2)東南アジア研究奨励助成(修士・博士)の二つのサブ・プログラムからなる。

研究能力向上プログラム(RSTP)の概要

本プログラムは従来のインドネシア若手研究助成から発展したものであり、若手研究者の研究能力の向上が必要であるという現地のニーズを取り入れてプログラムの内容を変更した。インドネシア若手研究に関して、これまでの評価で若手研究者の批判的視点の不十分さ、理論面での知識不足、方法論の弱さ、そして論文執筆技術の未熟さ等の問題が指摘されてきた。本プログラムはこの問題に取り組むことを支援するものであり、大学、および独立系の研究機関、研究型NGOなどの広範な機関を対象として、特定の調査方法や研究過程の特定の部分に焦点をあてた訓練ワークショップの実施を助成する。この実験的試みを通じて、若手研究者の能力を向上させるために効果的な方法をさらに探っていきたい。それと同時に、トレーニングを受けた若手研究者が、将来研究資金を財団の他のプログラムに求めるような研究者グループに育つことも期待している。

本プログラムは、申請希望者と財団との話し合いによって形成されるものであり、公募は行っておらず、財団内部の会議で決定される。

「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成プログラムの概要

1978年に、7冊の東南アジア歴史書と文学書を日本語訳するプロジェクトで出発した「隣人をよく知ろう」翻訳出版促進助成プログラムは、今年で23年目を迎えた。現在、本プログラムは、「日本向け」と「アジア相互間」の二つの柱をもっており、前者は、東南アジア・南アジアの文学書や人文・社会科学書を日本語に翻訳・出版し、日本人に比較的馴染みの薄いこれらの地域の思潮や文化を紹介することをねらっている。これまでは、東南アジア、南アジア諸国の言語で記された書籍の翻訳を重点的に行ってきたが、1998年度より欧米語文献や欧米人の著作を対象に含めた。

「アジア相互間」プログラムは、東南アジア(カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、フィリピン、タイ、ヴェトナム)・南アジア諸国(バングラデシュ、インド、ネパール、パキスタン、スリランカ)・モンゴルの出版人・読書人が、日本を含めたアジア諸国の書物を自国語に翻訳出版するのを支援しており、歴史、民俗、文学などの分野の人文書の翻訳・出版を重点的に助成する。出版界が欧米書の翻訳に傾きがちなこれらの地域の人々に、隣人であるアジア諸国の歴史や文化に親しんでもらうことがねらいである。翻訳者、出版社いずれからの申請も受け付ける。

東南アジアプログラムの活動理念

トヨタ財団東南アジアプログラムの活動理念は、文化的多様性が、社会における重要な価値として広く国際社会に根付くよう、国家、民族、人種、性別、宗教の違いを超えて、文化的相違についての正しい理解と寛容さを育むことである。

トヨタ財団は、多元価値社会の創造と市民社会の発展を、助成財団としての活動の基本理念としている。今日の国際社会において多元的価値を実現するためには、多様性への寛容と尊重を推進することが必要であり、これはアジア、および世界規模で相互理解を進める上で不可欠な基盤となる。また、特に現代社会において市民や非政府組織が果たす役割は大きく、すべての市民が自由に考え、広く話し合い、知識と、その発表の機会と手段を得て、自らの考えに基づきよりよい社会の実現をめざすことが世界共通の課題となってきている。

東南アジアプログラムの活動理念を文化的多様性の維持、発展とするのは、このような財団の基本理念に基づくものである。財団は、助成プロジェクトの行なわれる地域コミュニティ、国民国家、そして東南アジア地域全体という全てのレベルにおいて活動理念の実現を目指すものである。

重点領域

■東南アジアの人々による人文・社会科学のプロジェクト重視

財団は、東南アジア地域の人々が行なう人文・社会科学の分野の研究やプロジェクトを支援することで積極的な役割が果たせると考える。その中でも特に研究費が出にくい分野や、開発ドナーによって軽視されている諸分野に焦点を当てたい。財団の資源は限られており、社会の基本的ニーズや経済開発などの諸分野に直接的に取り組むような立場にはない。むしろ、軽視されがちではあるが長い目で見て必要とされる分野に特化することで最も効果的な活動ができると考えるのである。

何故、人文・社会科学なのか?　この分野の研究は人々が自ら自身、および隣人の歴史や社会をより深く理解する一助となるからである。さらにはそこから当面する深刻で複雑な社会的課題を解く手掛かりが見つかることも決して少なくないからである。

何故、東南アジアなのか?　東南アジアは多様性に富んだ地域であり、他のアジア地域と比べて知るべきことはまだ山ほどある。また、日本を含む東アジアや南アジアの隣人たちとの関係は歴史的に古くから親密なものであるが、しかし、時には深刻な問題があったことも忘れてはならな

い。財団の限られた資源の活用という観点から、東アジアや南アジアに比べて人口の少ない東南アジアではより効果的な活動が出来ることも一つの要素である。

何故、東南アジア地域の人々によるプロジェクトなのか？

財団は東南アジア地域に住みそこで活動する人々を支援したい。何故ならば、かれらこそが自らの社会の直面する諸課題を身近に理解している当事者だからである。しかも、ポスト・コロニアル、ポスト冷戦の時代において、かれら自身が様々な課題を新しい方法で再構成し、再定義し、再解釈していく可能性は大きい。

■周辺化された人々に関連するプロジェクト重視

資源へのアクセスという点で不利な立場にある人々を支援したい。このことは、政府、財団、研究者から省みられなかった社会の周辺に置かれたグループに焦点を当てたプロジェクトを支援することを意味している。また、歴史的に周辺化させられたグループがその文化や歴史を自ら表現し発言する機会も支援していきたい。

■域内協力の振興

東南アジア諸国の間にも豊かさや機会の格差が存在することを考えると、財団は国境を越えた協力を支援し、より発展した国々がその知的、制度的資源を発展途上の国々と分かち合うことを促進していきたい。

■研究訓練の重視

東南アジアでは若い研究者のだれもが研究上の訓練をしっかりと受ける機会に恵まれているというわけではないので、将来有望な若手が研究者としての批判的、分析的な能力を向上させることに助成活動の一つの焦点をあてたい。将来、かれらが教育者、社会問題に取り組む知識人、あるいは信頼される社会批評家として重要な役割を果たすことを期待したい。

■学問的議論の国境を越えた共有化の促進

最後に、財団は助成対象者が活動する諸領域の学問的議論を活発にし、かつ東南アジア地域内外の地域の人々との間でのアイディアや知識の共有化に対しても支援を行ないたい。

2002年度　東南アジア関連プログラム　助成対象国一覧　　2003年3月31日現在

	東南アジア国別助成プログラム		東南アジア研究地域交流プログラム		研究能力向上プログラム		「隣人をよく知ろう」プログラム			
		(ドル)		(ドル)		(ドル)		日本向け(円)		アジア相互間(ドル)
カンボジア	9件	145,600			1件	40,500	1件	1,120,000		
中国(雲南 西双版納)										
インド							2件	2,750,000	1件	1,500
インドネシア	15件	181,900	5件	47,200	2件	60,602	2件	3,580,000	3件	24,700
ラオス	5件	24,300							1件	6,400
マレーシア	1件	6,000	5件	58,255						
ミャンマー(ビルマ)	5件	74,800	1件	4,740					2件	5,100
ネパール										
パキスタン									2件	8,000
フィリピン	15件	152,700	6件	87,465						
シンガポール			1件	12,000						
スリランカ									1件	6,000
タイ			3件	38,700			1件	2,880,000	3件	18,000
ヴェトナム	12件	118,400			1件	36,000	2件	2,480,000	1件	6,500
合計	62件	703,700	21件	248,360	4件	137,102	8件	12,810,000	14件	76,200

Ⅲ-1 東南アジア国別助成プログラム(SEANRP)

選考を終えて | 清水 展[選考委員長]

選考結果の概要

東南アジア国別助成プログラムの選考委員を5年間勤めた後、今年から石澤良昭先生の跡を継いで選考委員長の任に就くことになりました。これまで選考委員として助成案件の審議に加わることをとおして、財団が支援しているプロジェクトや財団のプログラムを深く知る機会に恵まれました。また東南アジア各国の学術文化芸術サークルにおいて、トヨタ財団に対する評価と期待が、日本で考えている以上に、きわめて大きいことを何度も実感いたしております。

そのような意義あるプログラムの委員長の任をお引き受けすることは、名誉であると同時に責任の重さも感じざるをえません。非力ながら最善を尽くすつもりでおります。トヨタ財団が、民間としての自由さと身軽さを最大限に活かして、各国それぞれ個別の事情に即した助成活動を柔軟かつ迅速に行ってゆくことに少しでもお役に立つことができれば、望外の幸せであります。

国別助成の選考システムは以下のようになっています。まず、申請の打診は年間を通じて受け付けており、プロジェクトが妥当であると判断された場合に、財団のプログラム・オフィサーが必要に応じて、現地であるいは日本で申請予定者と適宜面談を行っております。2002年度は、300件以上の申請打診が寄せられ、プログラム・オフィサーによるスクリーニングの後、98件の申請書が正式な手続きを経て東南アジア国別助成プログラムに寄せられました。国別選考委員会での慎重な検討を経て、今回は58件の申請を助成対象プロジェクトとして2002年9月の理事会に推薦し助成が決定されました。58件の申請の内訳はカンボジアが9件、インドネシアが14件、ラオスが4件、マレーシアが1件、ミャンマー(ビルマ)が5件、フィリピンが13件、ヴェトナムが12件です。

本年度、東南アジアプログラムは、プログラムとして初めて、その活動理念を明文化しました。この東南アジアプログラムの活動理念は、1974年の財団創設時の設立理念に沿ったものです(東南アジアプログラムの活動理念はp.43参照)。

また、本年度は二つの重要な申請手続の変更がなされました。まず今年から、2年間の継続プロジェクトに対する助成に関しては、再申請の手続きを取ることなく2年分の決定ができるようにしました。従来は継続案件であっても、単年度でしか助成が決定できないために、申請者は毎年新たに申請をしなければなりませんでした。今回、2年継続プロジェクトの助成対象者は、助成開始後11ヶ月後に1年目のプロジェクトの進捗状況を十分に説明した中間報告書を財団に提出し、その内容によって2年目の助成金の可否を決定することとしました。報告書の内容がプロジェクトの継続に値すると評価された場合には、2年目の助成金が送金されますが、内容が不十分であると判断された場合は、改善を示す内容の報告書が送られてくるまで保留とされます。

もう一つの変更は、助成対象者がその成果を出版する場合、出版に対する助成申請は年間を通して受け付けることができるようにしたという点です。出版助成に対する可否の決定は、従来どおり選考委員会で行い、理事会にその結果を推薦するという方法をとります。

このように選考の手続きを変更したのは、申請から助成決定に至る一連のプロセスを簡略化するためであり、これによって助成対象者に時間的な余裕とプロジェクト推進の柔軟性をもたらすためです。また、プログラム・オフィサーにプロジェクトの決定とモニタリングにおいてより多くの責任を課すとともに、逆に選考委員が年度ごとに大量の申請書を評価し助成の可否を決定しなければならない負担を軽減することを目的としています。この新しい制度の効果が現れるまでには、まだしばらく時間を要すると思われます。

選考委員会の開催方法については、2001年に変更された制度に従いました。変更前は国別検討会と全体会という2回の選考委員会が開かれていましたが、近年、申請

数が増加し、その内容も専門的になってきているために、選考委員全員が一堂に会して申請書の審議をしても有意義な議論が出来ないという問題が生じていました。そこで昨年からは、まず国別の検討に重点を置くこととし、そこで決定された事項を選考委員長が承認した後に、再び国別の選考委員の間で回覧し承諾を得るという制度に変更しました。これによって選考委員と財団スタッフの仕事量が大幅に軽減されることになりました。もちろんプログラム・オフィサーは、全ての選考委員が結果を承諾する時までに、国別検討会で選考委員から出された質問に答えるために必要な情報を収集するなどの責務を負っております。

2002年度の傾向

本年度の助成対象に見られる顕著な特徴は、採択された案件の多くが、新しい活動理念の枠組みの中でプロジェクトを作っていこうとする東南アジアプログラムのスタッフの試みを反映したものとなっていることです。活動理念の中に、「東南アジア諸国の間にも豊かさや機会の格差が存在することを考えると、財団は国境を越えた協力を支援し、より発展した国々がその知的、制度的資源を発展途上の国々と分かちあうことを促進していきたい」という方向性が示されています。これに即して、プログラム・オフィサーは東南アジアの中でも助成の優先度が高い国(ラオス、カンボジア、ヴェトナム、インドネシア)に重点を置いて活動し、その他のより発展した国には、それほど活動の重点を置きませんでした。そのため、今年度はタイに対する助成がなく、マレーシアも1件だけという結果になりました。しかし、将来的には、シンガポール、マレーシア、タイの学術界・学術機関の知的資源やインフラ、経験などを他の国のために活用していくようなプロジェクトを支援していきたいと考えています。

東南アジア諸国を助成の優先度が高い国とより発展した国に分けたとき、フィリピンはその中間に位置しています。フィリピンは経済的には発展途上であり、国内の富や権力は地理的、民族的、宗教的に不均衡に分配されています。その一方で、知識人、学者、活動家の層は厚く、そのような人々を輩出した研究教育機関や市民社会は、その実力や実績、洗練度という点からはアジアにおいても多大な影響力を持っています。その意味でフィリピンは、財団が今後、他の国でも実践したい様々な新しい試みの実験場になっています。それは、例えば少数民族(先住民)の文化について、当該コミュニティのメンバー自身が参加して行われるプロジェクトや、研究や活動の成果がアカデミックな学者のサークルに向けられたものというよりは、そのコミュニティのメンバーや地域社会に向けられているプロジェクトなどを指しています。フィリピンでは政治に自覚的で、自らを組織化している少数民族と、少数民族と共に生きることにコミットしている研究者との結びつきが新しい動きを作り出しています。この点は、これまでにも財団が関心を持って取り組んできた問題であると同時に、新しい活動理念にも反映されております。

東南アジアプログラムの活動理念のもうひとつの柱は、助成するプロジェクトの結果よりも、そのプロセスを重要視するという点にあります。そのため、先進的な取り組みや、優秀な若手研究者の分析力や批判精神を養うプログラムに積極的な助成を行っています。例えば、ヴェトナムにおいては、政府によって少数民族として承認されていないグオンの人々のアイデンティティを扱うプロジェクトがあります。前述のフィリピンのプロジェクトのように、地域のコミュニティの人々が「活動家」として参加しており、彼らが民族誌や言語学、歴史学的な証拠を収集し、グオンを少数民族として政府に承認してもらおうとする運動を推し進めています。このプロジェクトにおいては、結果よりも地域の人たちのプロジェクトへの参加そのものが重要であると言えるでしょう。また、カンボジアでは、カンボジアの若手建築家とアメリカの著名な研究者が共同で、カンボジアの地方の建築を記録するというプロジェクトを行っており、その中でも若い研究者に対する研修を行うということが、記録の結果そのものと同様に重視されています。さらに、ラオスでは、これまで政府機関に所属している研究者以外に助成することは稀でしたが、本年度は、創作文芸のワークショップを開催するというプロジェクトに助成することとなりました。これは、ラオスにおける財団の助成活動として全く新しいアプローチを試みたものです。

最後に、今年の傾向として、歴史や過去を振り返るのではなく、タイムリーな現代的な諸課題を扱ったプロジェクトが幾つか含まれることが挙げられます。たとえばインドネシアでは、民族が分断されているソロ市の都市の形成史を記録しようというソロ・ヘリテッジ・ソサエティー(ソロ伝統文化協会)によるプロジェクトがありますが、これは過去3年間にわたる民族暴動によって破壊されたソロ市を再

建し、歴史建造物を再生させようというタイムリーな努力と密接に連関している活動です。ここでは、過去を解釈することが、学術研究だけにとどまらず、今日における現実的で早急に解決されるべき問題群への具体的で有効なアプローチの一つとみなされています。また、フィリピンの助成案件には、「ファースト・クオター・ストーム」と呼ばれる1970年代の反マルコス運動に参加した世代の歴史を、オーラル・ヒストリーの手法を駆使して記録しようというプロジェクトがあります。これは、マルコス体制を打倒した1986年2月の「ピープルパワー革命」を経て、現在に至るまでの民主化の運動と市民社会の建設に直接に関与した人々の生きられた経験をとおして、フィリピン社会の現代史を解明しようとする意欲的で画期的な試みです。

ミャンマーからの申請件数は徐々に増加しています。これらは貴重ではありますが、どちらかというと保守的な、書かれた遺産を記録するというプロジェクトが多くを占めております。恐らく将来的には東南アジアの他の国々で行われているような新しいアプローチがミャンマーでも行われて行くと思われますが、現在のミャンマーにとっては、こうした地道な調査研究が必要とされていることに配慮しなければなりません。最後に東南アジア最大の人口を持ち、経済、政治、社会の立ち遅れという深刻な問題を抱えているインドネシアは、今年、東南アジアプログラムの中でも申請数が最も多く、その内容も歴史学、文学、人類学、パフォーミングアート、建築と多岐にわたっております。

活動理念の中にある、「財団は助成対象者が活動する諸領域の学問的議論を活発にし、かつ東南アジア地域内外の地域の人々との間でのアイディアや知識の共有化に対しても支援を行ないたい」という点については、残念ながら、まだ実現しておりません。選考委員会としては、財団がこのようなプロジェクトを発展させて行くことに賛同し、支援したいと考えております。たとえば、少数民族の音楽伝統を記録するというプロジェクトがカンボジア、ラオス、インドネシアから申請されており、また類似のプロジェクトへの助成申請が他の国からも出されてきております。来年以降、東南アジアの国々の助成対象者や申請者、専門家を招いて、パフォーミングアートを記録する方法と意義についての国際会議を開催するということも考えられるのではないでしょうか。選考委員会は、このような試みを支援したいと考えております。

国別の助成プロジェクトの詳細については、以下国別の助成についての項を参照していただければ幸いです。

なお、本プログラムで助成を受けたプロジェクトの成果出版の申請が2002年12月20日までに5件提出され、審査の結果、2003年3月の理事会で4件が助成対象として決定されたことを付け加えておきます。

カンボジア

カンボジアの政治状況は依然として不安定であり、経済も依然として停滞している。しかし、1990年代中頃に財団がカンボジアで助成を行うようになってからの比較的安定した時期には、社会が良い方向に移行するであろうという可能性が感じられる。

東南アジア国別助成プログラム(SEANRP)のカンボジアにおける目標は昨年来変わっておらず、これは将来的にも継続される。第一に、カンボジア語で書かれたあらゆる分野の出版物が不足しているということから、財団は人文社会科学の教育や研修に役立つ書籍が出版されるようなプロジェクトを支援することを奨励している。この目標は、計画助成によって行われるカンボジアにおける出版状況の調査プロジェクトによって補完されている。第二に、トレーニングの要素、特に年配の経験を積んだ研究者と若手の研究者や学生を組ませるという形での研修の要素を含んでいるプロジェクトを奨励している。最後に、財団は助成を通じて重要な文化組織や機関を強化することに継続して取り組んで行きたいと考えている。

本年度は12件の申請書が寄せられ、そのうち2件の出版を含む4件の継続案件は全て採択された。また、残りの8件の新規案件のうち5件が採択された。

ヴァン・モリヴァン氏とケオ・ナロム氏の出版プロジェクトは過去数年間、財団が助成してきたプロジェクトの成果を表すものである。

サム・アン・サム氏の継続案件はラタナキリとモンドゥルキリの東北諸州の高地少数民族の音楽についての研究である。当初1年計画であったものだが、複数の少数民族を調査するために更にもう1年研究期間が延長された。

レク・サレット氏も同様に助成期間が1年延長され、地方固有の建築の記録を引き続き行う事になった。シエムリェップ州での調査はほぼ完了しており、来年はハワイ大学のウイリアム・チャプマン教授の参加という貴重な機会を得てタケオ州での調査を行う。このプロジェクトには、王立芸術大学の若手の建築家のトレーニングという要素

が含まれている点が重要である。

新規案件のうちの一つは、若手考古学者のボン・ソヴァス氏への例外的な助成である。この助成によって、彼はアンコール・ボレイの南部から発見された重要な先史時代の陶磁器の研究を博士論文にまとめることができる。論文執筆中はハワイ大学に滞在し、論文の完成後はそのディフェンスを行う。

東欧諸国で博士号を修得した二人の学者が社会学、文学の分野でそれぞれ助成を受ける。非政府研究機関の代表であるヘアン・ソコン氏は仏教僧の聖職授任式の研究をインタビューに基づいて行う。ソン・ソムニー氏は現代カンボジア文学、特に戦争と混乱の時代であった過去30年間—それ故に大変興味が注がれる時代—に書かれた文学について研究をしようというものである。このプロジェクトは、彼が教鞭をとる王立プノンペン大学のカンボジア文学の授業のために有用な教材を提供する事が目的である。

最後に、新しい文化NGOであるレイユーム芸術文化研究所で二つのプロジェクトが行われることとなった。レイユーム芸術文化研究所の共同設立者であり、王立芸術大学の美術史の講師でもあるリー・ダラヴット氏が教材のための本を執筆する。クメール美術史に関して書かれた重要なフランス語の著作をクメール語に翻訳し、解説をつけるというものである。テキストと格闘し、情報をアップデートし、まだ存命の著者がコンサルタントとして協力する2年間のプロジェクトである。

レイユーム芸術文化研究所で研究員として働いているサン・パラ氏は、カンボジア各地のワットと呼ばれる仏教寺院の壁画を調査し、記録するプロジェクトを2年間の助成を受けて行う。このプロジェクトは最終的には教科書と一般の読者を対象にした書籍として出版する予定であり、このプロジェクトはカンボジアの大衆的あるいは地方固有の絵画様式に対する従来の理解を覆すことが期待されている。

（担当：アラン・ファインスタイン）

インドネシア

本年度は、継続10件、新規4件のプロジェクトを助成することとなった。継続プロジェクトのうち2件は助成成果の出版を目的としたものである。スラウェシ島北部のマナドにあるサムラトゥランギ大学の研究所に所属するウラエン氏による『北方の島々：交易ルートから国境地域へ』はスラウェシ島北部からフィリピンのミンダナオの間にあるサンギルおよびタラウド諸島に住む民族で、国境形成以前から交易活動を行っており、そのような状況のもとで変化するサンギル・タラウドの人々の生活を描いた民族誌である。これまでこの地域の研究は取り上げられたことはほとんどない状況において、フィリピンとの国境を接する地域の研究は貴重であると同時に、今後の国境地域研究等への展開も期待される。また、ガジャマダ大学の若手講師であるマルガナ氏による『スラカルタとジョグジャカルタの王宮文書』は18、19世紀におけるジャワの下級官吏によるジャワ語による報告書で、オリジナルはスラカルタとジョグジャカルタの王宮に保存されていたもの。インドネシア語への翻字・翻訳作業を99年度と2000年度に実施しており、今回はその成果を出版する予定である。オランダ語による史料が主流となっている現代においては、ジャワ語によって書かれたものは貴重であり、今後当該分野の研究がよりいっそう深まることが期待される。

現在進行中のプロジェクトとしてはスマランのディポヌゴロ大学のジュリアティ氏を中心とした一連の海事史研究である「変革期におけるジャワ海域：バンジャルマシン港における民間航海の盛衰（1900年～1990年）」、危機に瀕している中国建築の現状および文化変容の中でチャイニーズコスモロジーとの関係を探るプラティウォ氏による「ジャワの中国建築」、学術雑誌の出版を助成することによって学術コミュニティの発展を目指すスニョノ氏を中心とした「学術雑誌『インドネシア言語学』の出版」、ガジャマダ大学の建築学科のアディシャクティ氏を中心とした景域保存の研究から政策提言までを含んだ「ミナンカバウ高地における都市と農村の保存に関するガイドラインの作成」、ハサヌディン大学のスタニスラウス氏がこれまでの研究成果をもとにシカゴ大学で博士論文の完成を目指す「トラジャ口承文学テキストの社会的生命」、LIPIの研究員であるニヌック・クレデン氏によるカリマンタン島の民間劇とその背後にあるバンジャール文化との関係を明らかにする「ママンダ劇：バンジャール文化の芝居」、南スラウェシのマカッサルで文化保存のためのNGOであるラタール・ヌサを主催するハリリンタル氏が実施する「現代ブギス社会におけるビスー：南スラウェシにおける女装シャーマンの学際的研究」、破壊されたソロの町を復興するために設立されたソロ・ヘリテージのメンバーであるクスマストゥティ氏を中心とした「中部ジャワ、ソロにおける紛争都市の歴史学、形態学研究（1893年～1998年）」が採択された。

いずれもプロジェクトは順調であり、来年度以降の成果が期待される。

新規プロジェクトは4件の採択となった。バンドゥン・インドネシア芸術高等学院の若手講師であり、スンダ伝統音楽演奏家を両親にもつヘルマワン氏による西ジャワのスンダ伝統音楽の理論と実際の演奏との乖離をフィールドワークによって測定し、その理論に異を唱える「スンダ音楽理論の再構築：チューニングシステムに関する一考察」。北スマトラ大学文学部民族音楽学科の若手講師であるハラハップ氏によるトバ・バタックの特殊コミュニティであるパーマリムでの儀礼音楽を取り上げる「フタティンギの『パーマリム』の音楽伝承：トバ・バタックの音楽伝統の記録」、と民族音楽に関するプロジェクトが2件採択となった。2人はいずれも海外留学経験のある若手研究者であり、今後の活躍が期待できる。また、「プラ・パクアラマン図書館の古文書の記述的カタログの作成」はプロジェクトリーダーのサクティムルヤ氏がジョグジャカルタのパクアラム王家の協力を得て実施するものであり、図書館の開架が著しく制限されていたプラ・パクアラマンの図書館の古文書研究が本カタログ作成によって促進されうる足がかりとなるプロジェクトである。また、「マンガライ口承文学の再生と研究：収集されたテキストのデジタル化」はフローレス島西部に位置するマンガライ地方の伝統文化風習などをオランダ人神父が書き残したものをパソコンに入力し、当該地域での研究に役立てるものであり、インドネシア大学のマンガライ地方出身のダタン氏によって実施される。いずれも、基礎史料の整備という観点からは非常に重要なプロジェクトであるといえる。　（担当：川崎恵津子）

ラオス

本年度は文学、歴史学、民族音楽等の分野を中心とした申請案件のうち、継続3件、新規1件の計4件に助成を行うこととなった。

まず、継続案件についてであるが、今回採択された3件はいずれもこれまでの研究成果の出版である。ラオス人研究者による学術出版は端緒についたばかりであり、研究、教育機関におけるラオス語の教科書、参考資料が圧倒的に不足している中ではいずれも非常に貴重な試みである。一つ目は、ヌー氏を代表とするラオス国立大学のラオス文学の教授たちによる共同研究プロジェクトであり、ラーンサーン朝後期の古典文学3部作のうちの2冊目である『サーン・ルッパスン』(由来記)の出版である。ドイツ人研究者フォルカー・グラボウスキー氏との共同研究として行われた本件は、ラオスと東北タイに現存する異本を校訂し、復刻を行うことで、これまでラオス文学史上では概説的にしか紹介されてこなかった作品のテキスト全文や現代語訳、分析を行っており、ラオス文学に関する研究資料としても大学のテキストとしても貴重である。

他の2件はいずれも少数民族であるフモンの文化を扱った内容となっており、ラオス在住のフモン研究者による成果の出版としてはほとんどはじめてのものである。一つは、ネン氏によるフモンの音楽に関する内容の本であり、フモンの音楽の特徴や楽器の説明、演奏方法などについてわかりやすく解説している。フモンの楽器のメロディは、フモン語を話すことと同じであるといわれるほど音楽が生活と一体化しており、本書を通じてフモンの文化についての理解が深まることが期待される。もう一つは、フモンの研究者であるソムトン氏と安井清子氏による共同研究で、フモンの村々を回り採話をしてきた民話の本の出版である。これまで、200以上の物語を採話してきたが、その中の10数編を書き起こし、解説を付けて出版する。ラオスにおける少数民族文化の研究はこれまであまり行われてこなかったので、この2件の出版が多民族国家であるラオスを理解する一助になれば幸いである。

新規案件では、作家であり、映像製作も手がけるブンタン氏による創作文芸ワークショップは、ラオスにおける新しい創作活動を奨励する試みとして高く評価された。ラオスでは他の多くのアジア諸国同様、作家が作品を発表し、文筆で生計を営むことは非常に難しい。雑誌や新聞などに短編小説や詩などが掲載されることはあっても、作品発表の機会は非常に限られている。その一方で、若手の間には文芸を志している人々もおり、タイ語ではなく、ラオス語の文学作品を読みたいという読者層も確実に存在している。本件は、そのような若い文学青年を対象として、創作文芸ワークショップを開催することで、世界の文学作品に触れ、その文体や作風を学ぶことで、文芸批評と文学による創作活動を行う場を提供する。将来的にはワークショップの参加者の作品を現代ラオス文学のアンソロジーとして出版されることが期待される。

今回、採択になったのは4件と少なかったが、不採択になった案件の中にも将来大きな可能性を秘めているものがいくつもあった。英語で申請書を書くという不慣れな

作業のため、今回は良い結果が出せなかったものの、今後、より焦点を絞って研究計画を練り直し、再度申請を行うことが期待される。また、個人の研究プロジェクトを支援する一方で、情報交換やネットワークを構築する上で有効な上記のようなワークショップの開催や、人材育成を含めた研究基盤を強化するようなプロジェクトに助成を行う必要があると思われる。ラオスのペースであせらずじっくり、ラオスの人々と共に良い案件を作っていきたい。

(担当：小川玲子)

マレーシア

継続案件の1件への助成のみとなった。国内の研究資金状況は他国より比較的恵まれていることに鑑みて、積極的に新規案件を発掘しないことにしている。しかしながら、大学に所属していない研究者へのサポートや少数民族研究、東マレーシアにおける研究などについては注意を払っていく方針としていることを受けて、継続案件である「ボボヒザン(カダザン民族女祭司)の言語」のみの助成となった。ボボヒザンはサバ州のマジョリティであるカダザン人の女祭司であり、本プロジェクトは祭事をとりしきる際に用いられる彼らの特殊言語を記録し、後世に伝えることを目的としている。

(担当：川崎恵津子)

ミャンマー(ビルマ)

政治状況が依然として不確実であることから、助成申請者に直接助成をするという形でのミャンマーにおける財団の助成はようやく2年前に開始された。ミャンマーにおける最初のプロジェクトは、大学歴史研究センター(UHRC)のニーニーミン氏による文献の目録化、保存及びマイクロフィルム化による2年間のプロジェクトである。これは、国際交流基金アジアセンターからの3年間の助成のあとに行われた。

申請者の数は徐々に増加している。これらの申請者は1950年代から1960年代に教育を受け、研究者としての地位を確立した人々で、そのうちの多くが、UHRCや大学中央図書館(ヤンゴン大学)、新しく出来た東南アジア文部大臣機構歴史と伝統地域センター(SEAMEO-CHAT)に関係しており、それらの人々の間には相互に関係がある。若い研究者によるプロジェクトの発掘は今後の課題である。これらは知識的、学術的フロントとして、国際社会に対して開かれている小さいが重要な窓口である。UHRCやSEAMEO-CHAT、その他の機関は、外部の知識世界とのつながりである。

本年度は、6件の助成申請が寄せられ、そのうち5件が採択された。5件のうち2件は継続案件で、3件は新規案件である。採択された殆ど全てのプロジェクトは、様々な言語や文字で破損しやすい文書に書かれている歴史文献の保存と公開に関するものである。

ニーニーミン氏とそのグループは、地方の図書館や多くの場合、僧院に収められている歴史資料を調査し、記録し、保存するというプロジェクトを引き続き行う。このプロジェクトには更に2年間の助成をおこなうことが決定した。新規案件のうちの一つは、同グループの一人、トウ・カン氏によるシャン州南部でこれまでに調査された地方文献全てをカタログ化したシリーズの第1冊目の出版である。このカタログはヤンゴンに保存されているマイクロフィルムを参照資料として記述することにもなっている。

愛知大学のトゥンイー氏による継続案件も同様に歴史文書に関するものである。これはマイクロフィルムから特別なテキストを探し出し、複写し、翻字し、英語の解説をつけるものであり、将来に出版を通じて普及される予定である。

トウ・カン氏と同様に図書館で司書として長年働いてきたティンポンヌエ氏による新規案件は、トウ・カン氏のプロジェクトと類似しており、大学中央図書館のパラパイと呼ばれる折り畳み式の文献の目録とデータベースを構築し、研究者などの利用に供するというものである。

最後に著名なシャンの歴史学者、サイオントゥン氏が彼の長年の夢であった古代から1960年代初期までのシャン州に住むタイ語を話す人々の通史を完成させる。

(担当：アラン・ファインスタイン)

フィリピン

本年度は歴史学、人類学、文学分野における研究プロジェクトの他、NGOからの申請がルソン、ヴィサヤ、ミンダナオの各地域から出され、その中から継続5件、新規8件の合計13件に助成をすることとなった。

フィリピンにおける助成案件は80年代から90年代半ばまで地方史、地方文化に対する支援を中心としていたが、90年代半ば以降、演劇や食文化といったポピュラーカルチャーやNGOの調査活動に対する支援等へと重点がシフトした。2001年以降は担当者が交代したこともあり、ポ

ピュラーカルチャー色がやや薄れ、フィリピンにおけるマイノリティ文化の継承や文化をツールとした社会運動的な案件が増加してきている。その中でも、一つの柱となっているのは先住民族に関わるプロジェクトである。今回、継続案件では、人類学者であるアントン・ポストマ氏を代表とするミンドロ島の先住民族マンヤン族の口承伝統の編集作業やアルベルト・アレホ氏のグループによるミンダナオ島の先住諸民族ルーマッドの青年たちの作品集の出版などがある。マンヤン民族の住んでいるミンドロ島の山間部では2001年国軍と新人民軍の対立があり、また、ミンダナオ島はこれまでも紛争が続いており、同時多発テロ以降、米軍の部隊が合同演習という名目のもとに駐留をしている地域である。政治的に非常に緊張した状況であり、コンピュータに対するアクセスも容易ではない中で行われているこれらのプロジェクトの成果が、まず先住民族のコミュニティの中で共有化され、そしてマジョリティの側の社会認識を変えるためにも学校教育やNGOのネットワークを通じて、多くの人々に読まれることを期待したい。また、今回、新規案件では、ルソン島北部のベンゲット州においてカンカナイ語の辞書を編集するというプロジェクトが地域住民と外部者であるNGOのリーダーであるローランド・ロレド氏や言語学者、文化人類学者などの協力のもとに行われる。1997年に施行された先住民族権利法(IPRA)の運用と解釈をめぐり、政治的な駆け引きが続く中で、社会の中で最も脆弱な位置にいる先住民族の特に若い世代が希望を失わないようなプロジェクトを支援したい。

本年度の採択案件の第二の特徴としては、フィリピンの歴史学、特に現代史に関わる案件が3件見られたことである。まず、「フィリピン史の系譜」と題してフィリピン内外の第一線で活躍する歴史学者等を招いて開催されるレイシル・モハレス氏によるワークショップは、フィリピン歴史学に大きな足跡を残した著作や理論を、これまでの西欧中心主義やナショナリストといったラベルをはずし、新しいレンズで見ることによって検証をする。これは、これまで欧米を中心に発展してきた東南アジア研究を東南アジア域内に位置付けようとする試みでもある。次に、1970年代初期の最も反政府運動が激しかった時代に、その運動の担い手となった世代のオーラルヒストリーを収集するという政治学者アイリーン・バヴィエラ氏によるプロジェクトがある。現在、政府や大学、NGOやメディアなどの中心的メンバーとして活躍しているこの世代は、市民社会の担い手として時代を動かす一方で、1人の人間として何を考え、感じ、行動してきたのか。そして、それが現在のフィリピン社会の形成にどのような影響を与えているのかを明らかにするという意欲的なプロジェクトである。最後に、歴史学者であるホセ・クルス氏によるアテネオ・デ・マニラ大学に所蔵されている1947年から1972年までの報道写真をデジタル化するというプロジェクトがある。これらの写真には、この半世紀の間の様々な出来事、例えば、フィリピン共和国の独立、アメリカとの特恵貿易、スービック、クラーク等の米軍基地の駐留、土地問題の解決を目指した農民運動であるフク団の台頭、マグサイサイ、ガルシア、マガパガル政権時代、そしてマルコス政権による戒厳令布告に至るまでのフィリピンの現代史の歩みがビジュアルに映し出されており、歴史史料としても大変貴重である。デジタル化することで、フィリピンの現代史を理解するための資料の公開が進むことが期待される。

最後に、政策提言的な要素を含むいくつかの重要なプロジェクトを紹介したい。まず、継続案件として本年度出版が行われる『キアポ：マニラにおける遺産と変容』は、これまで2年間行われてきたマニラの下町キアポに関する学際的な研究の成果である。シアルシタ氏を中心とするグループは、キアポの歴史や建築、宗教や食文化を多面的に研究することで文化遺産保存の重要性を訴える。本書が、各地で取り組みが進んでいる文化遺産保存のための政策立案や参考資料として活用されることが期待される。二番目に、貧困や内戦の問題が噴出しているミンダナオにおいて、今回、10余りの大学やNGOがネットワークを結成し、今後ミンダナオ研究を発展させるために、まず現状を分析することが必要だとの認識に立ち、これまでのミンダナオ研究を総括するようなプロジェクトを行う。成果がまとまった段階で、国内、国際会議を開催し、ミンダナオ研究の今後の方向性を探る予定であり、平和構築と発展へ向けたミンダナオからのイニシアティヴとして高く評価したい。三番目に、バタンガスという南タガログの港町の芸能をデジタルメディアで記録し、市の博物館に展示するというマリアン・ロセス氏による実験的なプロジェクトがある。博物館という制度が誰のどのような記憶を展示しようとしているのかを問い、モノではなく芸能を中心としたフィリピンの文化伝統を先進的な形で展示しようとする試みである。またその過程で、博物館を中心とした文

化行政のあり方について政策提言を行う予定である。四番目に、植民地時代の封建的な社会構造を色濃く残しているネグロスにおいて、地域の農民や学校の先生、地方政府の役人たちが地域の文化資源の基礎資料を作成し、文化政策を提言するというプロジェクトがブレンダ・ファハルド氏のグループによって行われる。これも文化を通じたコミュニティのエンパワーメントとして、将来のモデルケースになってくれればと願う。

以上の助成案件を振り返ると、アカデミズムの内側で完結するいわゆる研究らしい研究はほとんどなく、所与の存在ではないフィリピンという国家、あるいは社会に対峙し、その過去や現在を理解することでより良い未来を築こうとしているダイナミックな現代フィリピンの姿が浮かび上がってくる。ローカルであれ、ナショナルであれ、文化を語る語り口には常に政治や経済の問題がついてくる。文化をエンパワーメントのための一つのツールとして、より公正な社会の実現を目指すようなプロセスの後押しができればと思う。 (担当：小川玲子)

ヴェトナム

本年度は全体で36件の助成申請があり、12件に助成することが決定した。そのうち、継続は6件、新規が6件である。昨年度に比較して本年度は、女性研究者の進出が目立った。

本年度のヴェトナムでの助成活動は、若手研究者による研究、ヴェトナムの人類学の発生と発展に貢献するような研究、少数民族やジェンダーに関する研究、多くの研究者に利益をもたらすような質の高い一次資料の編纂プロジェクトへの支援を優先して行った。どちらかと言うと、質が均一であった昨年の申請書に比較して、今年寄せられた申請書には質の面でばらつきがみられた。現在ヴェトナムでは、民族学を人類学と言う枠組みの中に入れて行こうという動きがあり、国外の人類学者との交流を奨励し、大学や各研究機関のカリキュラムの改革が話し合われ、講師や若手研究者の養成が盛んに行われている。質の高かった申請書がいずれも民族学/人類学関係であった事を考えると、申請書にもこのようなヴェトナムの人文社会科学界の動向が反映してきていると言える。

ファン・ティ・ヴィン氏による三つの水上コミュニティの比較研究は、高地少数民族と比較するとあまり研究されてこなかったトピックで、このエスノグラフィーは貴重な資料を提供する事が期待される。ファン・ゴック・チエン氏による少数民族コホとチルの研究は、ヴェトナム人の人類学者によるエスニシティ論を使った、ヴェトナムにおける本格的なエスニシティ・スタディの最初の研究になるであろう。グエン・ヴァン・チン氏によるヴェトナム人類学の形成の研究は、ヴェトナムの民族学が今日にいたるまでどのように発展してきたかを調べる事によって、これからの人類学の方向性を模索するというプロジェクトで、非常にタイムリーな研究である。また、研究の目的、研究の視点、研究の方法いずれから見ても完成度の高い研究である。

歴史分野では、二人の女性研究者による一次資料を使った研究が、継続して助成対象になった。この二つの研究が歴史分野にもたらす影響は大きいであろうと期待される。ファン・フーン・タオ氏によるビン・ディン省で明命朝下に行われた均田政策の研究は、均田制が貧富の格差を減少させたと言う定説に疑問を投げかける新しい説を提示する可能性が出てきている。タ・ティ・トゥイ氏によるコーチシナにおける土地の割譲と返還についての研究は、予想以上の資料が見つかった事から、研究期間を当初の2年から3年へと延長した。この研究によってヴェトナム南部における植民地運営の内情が明らかにされるだろう。

今年は、ジェンダーに関する研究が昨年よりも多く寄せられた。その中で助成が決定したのは、チャン・ホン・ヴァン氏によるヴェトナム人女性と台湾人男性の結婚の問題の研究と、ハノイの若手研究者によるクメール女性の間で信用貸し付けの活用の研究である。二つの研究とも調査地は、ヴェトナム南部になった。チャン・ホン・ヴァン氏はホーチミン市の社会科学院の研究員で、これまでに、ホーチミン市内の売春の問題など女性問題に関する研究を続けてきた。都市部と農村部、ヴェトナム北部、南部における男女関係の差、異なる社会における女性の地位、結婚・家族・幸福の概念、人身売買等様々な研究要素を包含しているこの研究は、多岐の方面に発展する可能性を秘めていて面白い。ヴ・ディン・ムーイ氏の研究は、信用貸付を受けた女性たちの社会的な状況をクメールコミュニティーというコンテクストの中で考えようとするもので、クメール語(カンボジア語)の修得が研究課題の一つに入っており、ヴェトナムの民族学の新世代の登場を感じさせる。彼がどのような調査をするか注目して行きたい。

最後に、一次資料の編纂は、その資料が多くの学者、

研究者に利益をもたらすようなものに限るとして、比較的優先順位の低いカテゴリーであったが、ヴェトナム出版協会のライ・グエン・アン氏によるファン・コーイの著作の収集と編纂は、近代ヴェトナムの思想史、知識層の社会活動を知る上で貴重な資料を広く提供するものとして高く評価され、助成が決定した。ファン・コーイは、ファン・ボイ・チャウ、ファン・チュウ・チンら反植民地主義者とともに、反植民地・独立運動に参加したヴェトナムの著名なジャーナリストである。しかし、後に共産党に批判的だとして弾圧され、ファン・コーイに関する研究は今までできなかった。ドイ・モイ以降、ファン・コーイのような「メインストリーム」外の人々の研究ができるようになってきているが、この資料は各種新聞・雑誌に散らばっている彼の記事をヴェトナムとフランスに残されている資料を使って丹念に集めて編纂するものであり、貴重な資料を広く紹介するものとして期待される。

本年度の助成には、出版への助成が含まれていない。昨年指摘された出版物の問題、研究者を読者として想定しているはずの本に、脚注、引用、引用論文などの提示が無い、研究テーマの概要の部分と研究の成果であるデータの部分の関連性が無く、バラバラの二重構造になっている等のことが同様に指摘されたからである。また、今年の助成対象者は、ハノイとホーチミン市の大学、研究機関に属している人のみとなってしまった。昨年同様、地方から提出される申請書のレベルアップが、出版物のレベルアップと同様今後のヴェトナムプログラムの課題になっていくと思われる。

（担当：中村理恵）

◎助成対象一覧

助成番号下の（継X）は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(ドル) (助成実施期間)
	カンボジア		
1	D02-I-001 (継2)	タケオ州における残存と変化：カンボジアの固有建築と景観遺跡の記録	16,700
		L.サレット　王立プノンペン芸術大学　学部長補佐	(2年)
2	D02-I-002 (継3)	『カンボジアの音楽』のカンボジア語と英語による出版	18,700
		K.ナロム　王立プノンペン芸術大学　教員	(3年)
3	D02-I-003 (継3)	『近代カンボジア諸都市』のカンボジア語と英語による出版	18,400
		V.モリヴァン　閣僚評議会	(3年)
4	D02-I-004 (継2)	カンボジア東北諸州における少数民族グループの生活の中の音楽	10,500
		S.A.サム　クメール文化協会　会長	(2年)
5	D02-I-005	カンボジアにおける寺院絵画	28,300
		S.パラ　レイユーム芸術文化研究所　研究員	(2年)
6	D02-I-006	カンボジア仏教僧の聖職授任式：過去と現在	7,800
		H.ソコン　高等研究所会　理事長	
7	D02-I-007	20世紀におけるクメール文学の発展	10,000
		S.ソムニー　人文社会科学研究所　副所長	
8	D02-I-008	アンコール・ボレイにおける陶芸の編年：カンボジアのメコン川下流における先史、古代の工芸	13,400
		B.ソヴァス　ハワイ大学　博士課程	
9	D02-I-009	クメール美術史のマニュアル	21,800
		L.ダラヴット　レイユーム芸術文化研究所　理事代理	
	インドネシア		
10	D02-I-010 (継5)	変革期におけるジャワ海域：バンジャルマシン港における民間航海の盛衰（1900年～1990年）	2,400
		A.M.ジュリアティ S.　ディポヌゴロ大学文学部歴史学科　上級講師	(5年)
11	D02-I-011 (継2)	ジャワの中国建築	17,500
		プラティウォ　住宅建築研究所　研究員	(2年)

	助成番号	課目 代表者　所属	助成金額(ドル) (助成実施期間)
12	D02-I-012 (継3)	『北方の島々：交易ルートから国境地域へ』の出版	7,700
		A. J.ウラエン　サムラトゥランギ大学研究所　研究員	(3年)
13	D02-I-013 (継2)	学術雑誌『インドネシア言語学』の出版	4,400
		スニョノ D.　インドネシア言語学会　会長	(2年)
14	D02-I-014 (継3)	ミナンカバウ高地における都市と農村の保存に関するガイドラインの作成	12,000
		L.T.アディシャクティ　ガジャマダ大学工学部建築学科遺産保存センター　講師	(3年)
15	D02-I-015 (継3)	トラジャ口承文学テキストの社会的生命	29,500
		スタニスラウス S.　ハサヌディン大学文学部フランス語学科　学科長	(3年)
16	D02-I-016 (継3)	ママンダ劇：パンジャール文化の芝居	8,100
		ニヌック K.P.　インドネシア科学院社会文化学研究所　研究員	(3年)
17	D02-I-017 (継2)	現代ブギス社会におけるビスー：南スラウェシにおける女装シャーマンの学際的研究	18,300
		ハリリンタル L.　ラタール・ヌサ・マカッサル　所長	(2年)
18	D02-I-018 (継3)	スラカルタとジョグジャカルタの王宮文書の出版(1769年～1874年)	5,900
		S.マルガナ　ガジャマダ大学文学部歴史学科　講師	(3年)
19	D02-I-019 (継2)	中部ジャワ、ソロにおける紛争都市の歴史学、形態学研究(1893年～1998年)	35,100
		クスマストゥティ　ソロ・ヘリテージ・ソサエティ　会員	(3年)
20	D02-I-020	スンダ音楽理論の再構築：チューニングシステムに関する一考察	10,800
		D.ヘルマワン　バンドゥン・インドネシア芸術高等学院　講師	
21	D02-I-021	プラ・パクアラマン図書館の古文書の記述的カタログの作成	9,500
		S.R.サクティムルヤ　プラ・パクアラマン　研究員	
22	D02-I-022	マンガライ口承文学の再生と研究：収集されたテキストのデジタル化	12,900
		F.A.ダタン　インドネシア大学文学部インドネシア語学科　講師	(2年)
23	D02-I-023	フタティンギの「パーマリム」の音楽伝承：トバ・バタックの音楽伝統の記録	6,200
		I.ハラハップ　北スマトラ大学文学部民族音楽学科　講師	
24	D02-I-059	『ジャワのフロンティア地域ブスキにおける農業開発1870-1990』の出版	1,600
		ナウィヤント　ジュンブル大学文学部　講師	
	ラオス		
25	D02-I-024 (継4)	ラーンサーン朝後期ラオス古典文学『サーン・ルッパスン』の出版	1,600
		ヌー X.　ラオス国立大学人文学部ラオス語ラオス文学科　副学部長	(3年)

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(ドル) (助成実施期間)
26	D02-I-025 (継3)	フモンの民話の出版 ソムトン L.　情報文化省文化研究所　研究員	6,000 (3年)
27	D02-I-026 (継2)	『フモンの民族音楽』の出版 ネン X.　情報文化省出版局　副局長	1,500 (2年)
28	D02-I-027	ラオス若手作家のための創作文芸ワークショップ ブンタン P.　ラオス作家協会　フリーランス・メディアコンサルタント	12,000 (2年)
29	D02-I-060 (継5)	ラーンサーン朝後期の文学作品『プーン・ヴィエン』の出版 カムフン S.　ラオス国立大学ラオス語ラオス文学科　学科長	3,200 (5年)
	マレーシア		
30	D02-I-028 (継3)	ボボヒザン(カダザン民族女祭司)の言語 R.ラシンバン　カダザンドゥスン言語協会　代表	6,000 (3年)
	ミャンマー(ビルマ)		
31	D02-I-029 (継2)	サイン文書を通して見るコンバウン朝中期(1782年～1852年)の ミャンマー(ビルマ)農村社会の社会経済状況 トゥンイー　愛知大学国際問題研究所　客員フェロー	19,100 (2年)
32	D02-I-030 (継3)	古文書の保存と修復 ニーニーミン　大学歴史研究センター　会長	29,700 (5年)
33	D02-I-031	初期から1960年代までのシャン州の歴史 サイオントゥン　ミャンマー歴史委員会　会長	7,500
34	D02-I-032	大学中央図書館所蔵の古文書(パラバイ)のカタログ製作 ティンボンヌエ　大学中央図書館　司書長	3,500
35	D02-I-033	ミャンマー文書のカタログの編集、印刷、出版 トウ・カン　ミャンマー歴史委員会　メンバー	15,000
	フィリピン		
36	D02-I-034 (継2)	セント・トーマス大学所蔵の1600年～1900年までの書籍目録の作成(第2巻) E.S.マフエロ　セント・トーマス大学中央図書館　主任図書館員	9,200 (2年)
37	D02-I-035 (継3)	『キアポ：マニラにおける遺産と変容』の出版 F.N.シアルシタ　アテネオ・デ・マニラ大学社会学・人類学部　教授、文化遺産プログラムディレクター	10,500 (3年)
38	D02-I-036 (継2)	フィリピン文学におけるナショナリスト・フェミニスト作家である マグダレナ・ゴンザガ・ハランドニの研究 L.V.ホシロス　作家	3,200 (3年)

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(ドル) (助成実施期間)
39	D02-I-037 (継3)	マンヤン民族の文化テキストに関する研究	5,500
		A.ポストマ　マンヤン研究センター　所長	(4年)
40	D02-I-038 (継3)	ミンダナオ島の先住諸民族青年による文学選集の出版	8,300
		P.R.カストゥリリョ　アテネオ・デ・ダバオ大学文化対話のためのミンダナオイニシアティヴ	(3年)
41	D02-I-039	フィリピン史の系譜：実験的ワークショップ	10,900
		R.B.モハレス　サン・カルロス大学　教授	
42	D02-I-040	ネグロス・オクシデンタルにおける文化資源：エンパワーされたコミュニティの発展	10,000
		B.V.ファハルド　バグラン：地域開発のための芸術　事務局長	
43	D02-I-041	カンカナイ百科事典の編纂を通じての自己覚醒	9,900
		R.C.ロレド　Popular Education for People's Empowerment プロジェクト・ディレクター、アトク　プロジェクト	
44	D02-I-042	民衆史の写真化	10,000
		J.M.クルス　アテネオ・デ・マニラ大学社会科学部　学部長	(2年)
45	D02-I-043	フィリピン・オーラル・ヒストリー・プロジェクト：20世紀後半におけるFQS世代と国家	19,000
		A.S.P.バヴィエラ　フィリピン大学アジアセンター　教授	(2年)
46	D02-I-044	ミンダナオ研究の過去と現在	15,000
		R.M.デ・ウングリア　フィリピン大学ミンダナオ校　学長	
47	D02-I-045	「ドキュメンテーションをキューレーションする」：南タガログの三つの芸能	17,900
		M.P.ロセス　タオ・マネージメント　会長	(2年)
48	D02-I-046	公共の言説におけるスペースの形成：フィリピンのコミュニティ演劇	10,000
		M.A.T.パストラノ　パスンダヤグ財団　芸術ディレクター	(2年)
49	D02-I-061 (継3)	『英語で執筆しているフィリピン人女性作家：彼女たちの物語、1905 - 2002』の出版	7,900
		E.Z.マンラパズ　アテネオ・デ・マニラ大学図書館女性作家ライブラリー　事務局長	(3年)
50	D02-I-062 (継3)	『ロサリオ・デ・グスマン・リンガット(1924-1997)：自己と歴史の重み』の出版	5,400
		S.S.レイエス　アテネオ・デ・マニラ大学学際研究学部　教授	(3年)
	ヴェトナム		
51	D02-I-047 (継2)	チャム民族の叙事詩に関する研究	3,600
		P.チャム　ヴェトナム少数民族文学・芸術協会　研究員	(2年)
52	D02-I-048 (継2)	ミンマン帝治下、1839年の農地分配政策に関する研究	7,500
		P.P.タオ　ハノイヴェトナム国家人文社会科学大学　歴史学部　講師	(2年)

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(ドル) (助成実施期間)
53	D02-I-049 (継2)	近代におけるコーチシナでの土地割譲と返還要求(19世紀後半～20世紀中頃)	23,700
		T.T.トゥイ　ヴェトナム国家人文社会科学センター歴史研究所　部長代理	(3年)
54	D02-I-050 (継2)	アン・ザン省トアイ・ソン地区のオケオ-バテ考古複合址におけるオケオ文化住居址の研究	6,500
		D.L.コン　ホーチミン市社会科学院　考古学研究部長	(2年)
55	D02-I-051 (継2)	ソク・チャン省、ヴィン・ハイ村の多民族コミュニティの研究	6,100
		V.C.グエン　ホーチミン市社会科学院　文学博士	(2年)
56	D02-I-052 (継2)	ヴェトナムのグオン民族の民俗文化、言語の保存と発展	7,400
		V.X.チャン　ホーチミン市社会科学院　研究員	(2年)
57	D02-I-053	ヴェトナム人女性と台湾人男性の結婚の研究：現状、課題と提言	8,100
		T.H.ヴァン　ホーチミン市社会科学院　研究員	
58	D02-I-054	ファン・コーイ(1887年-1959年)の作品の収集、編纂、出版	12,900
		L.N.アン　東洋・西洋文化言語センター　編集者	(2年)
59	D02-I-055	漁業を営む水上居住者の研究：沿岸の三つのコミュニティの比較研究	16,000
		P.T.ヴィン　ヴェトナム国家人文社会科学センター東南アジア研究所　部長	(2年)
60	D02-I-056	文化のアイデンティティとエスニック・アイデンティフィケーション：ラム・ドン省のコホとチル	9,000
		P.N.チエン　ホーチミン市社会科学院　研究員	
61	D02-I-057	クメール女性による信用貸付の活用	6,900
		V.D.ムーイ　ヴェトナム国家人文社会科学センター民族学研究所　研究員	
62	D02-I-058	ヴェトナム人類学の形成	10,700
		N.V.チン　ハノイヴェトナム国家人文社会科学大学　アジア・太平洋研究センター　副所長	
		合計　62件	**703,700**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト(URL　http://www.toyotafound.or.jp/)をご参照下さい。

Ⅲ-2 東南アジア研究地域交流プログラム(SEASREP)

◎助成対象一覧(地域共同事業)
助成番号下の(継X)は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(ドル) (助成実施期間)
	インドネシア		
1	D02-EC-01 (継2)	カリマンタンとサラワクにおける「パン・ダヤック」アイデンティティの(再)構築 ユ・ラン T.　インドネシア科学院社会文化研究センター　研究員	10,450 (2年)
2	D02-EC-02	エスニシティの境界:北サラワクと東カリマンタン間の国境を挟んだリンケージ I.K.アルダナ　インドネシア科学院地域資源センター　研究員	11,150 (2年)
3	D02-EC-03	インドネシアとフィリピンの小説 ファルック T.　ガジャマダ大学文化研究センター　所長	9,500 (2年)
4	D02-EC-04	ヴェトナムとカンボジアの農耕文化の進化:比較の視点 ユニタ T.W.　インドネシア大学社会政治学部文化人類学科　講師	5,000 (2年)
5	D02-EC-05	東南アジア諸国の多文化教育:経験の共有 セミアルト A.P.　ジャーナル「人類学インドネシア」　部長	11,100
	マレーシア		
6	D02-EC-06 (継2)	アイデンティティをめぐる交渉と再創出: ペナンとメダンの華人による舞台芸術および音楽の存続と現状 タン S.B.　マレーシア科学大学文学部・大学院研究科　助教授	6,950 (2年)
7	D02-EC-07 (継4)	〔出版〕北ボルネオとフィリピンにおける伝統的マレーダンスと それに関するクリンタン音楽についての研究 J.プー・キティガン　マレーシア・サバー大学　講師	11,200 (4年)
8	D02-EC-08 (継2)	17世紀末から19世紀初めの東南アジアにおけるヴェトナム・チャンパ関係と マレー・イスラム地域ネットワーク D.ウォン, T.K.　マラヤ大学人文社会科学部歴史学科　講師	6,913 (2年)
9	D02-EC-09	越境:不法セクターの交易と交易商、スマトラ、南タイおよびマレー半島の非公式越境貿易の研究 D.ウォン I.B.　マレーシア国民大学マレーシア国際研究所　助教授	19,750
10	D02-EC-10	会議:東南アジアの西沿岸地域の共有された歴史、共同体および文化遺産 クー S.　ペナン遺産トラスト　名誉事務局長	13,442

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(ドル) (助成実施期間)
	ミャンマー		
11	D02-EC-11	ガジャマダ大学シャフリS.氏による東南アジアの 経済および文化変化(マレーシアとインドネシア)についてのミャンマー、ダゴン大学での集中講義 ウー・キャウ H.　ダゴン大学文化人類学部　教授	4,740
	フィリピン		
12	D02-EC-12 (継2)	カンポン・アイル(水上村)からのライフ・ヒストリー： フィリピン、ブルネイおよび北ボルネオの海上生活者の比較民俗誌 C.N. ザヤス　フィリピン大学国際研究センター　助教授	17,600 (2年)
13	D02-EC-13	フィリピン、ブリアルとタイ、バンチェンで発掘された腕輪の形態学的研究 M.G.L.D. バレット　フィリピン大学考古学研究プログラム　研究アソシエイト	5,000
14	D02-EC-14	個人、対人および社会政治的関係におけるコントロールの社会心理学： フィリピンとマレーシアの比較研究 C.J. モンティエル　アテネオ・デ・マニラ大学心理学科　教授	5,700
15	D02-EC-15	Bimp-Eagaの歴史的文化的基盤についてのワークショップ G.E.C. マテオ　フィリピン大学人文科学学部　助教授	4,892
	シンガポール		
16	D02-EC-16 (継4)	〔出版〕東南アジア伝統芸術と現代芸術の連続性についての研究： 変動期における起源、再発明、連続――ミャンマーの人形劇団編 オン K.S.　シアター・ワークス　芸術監督	12,000 (4年)
	タイ		
17	D02-EC-17	東南アジアのフモンの人々の口承史 プラシット P.　チェンマイ大学社会調査研究所　研究員	15,200 (2年)
18	D02-EC-18	ルアーンパバーンの仏教芸術 ティラサック D.　チェンマイ大学社会調査研究所　研究員	11,700 (2年)
19	D02-EC-19	ホー・チ・ミン市で話されるヴェトナム語における 礼儀の表現の変容過程に見られるアイデンティティとダイナミックス ソファナ P.　マヒドン大学農村発展のための言語・文化研究所　助教授	11,800 (2年)
		合計　19件	**194,087**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト(URL　http://www.toyotafound.or.jp/)をご参照下さい。

◎助成対象一覧（カウンシル関連事業）

助成番号下の（継X）は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(ドル) (助成実施期間)
	フィリピン		
1	D02-ER-01 (継8)	SEASREP事務局	24,273
		M.S.I. ジョクノ　SEASREPカウンシル　事務局長	(8年)
2	D02-ER-02	東南アジアの学生によるアジア・エンポリウム講座への参加旅費	30,000
		M.S.I. ジョクノ　SEASREPカウンシル　事務局長	
		合計　2件	**54,273**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト(URL　http://www.toyotafound.or.jp/)をご参照下さい。

Ⅲ-3 研究能力向上プログラム(RSTP)

本プログラムは従来のインドネシア若手研究助成から発展したものであり、若手研究者の研究能力の向上が必要であるという現地のニーズをとり入れてプログラムの内容を変更した。また、インドネシアだけでなく、カンボジア、ラオス、ヴェトナムにおいて同様のものを実施することを視野に入れている。

インドネシア若手研究助成に関して、これまでの評価で指摘された若手研究者の批判的視点の欠如、理論面での知識不足、方法論の弱さ、論文執筆技術の未熟さ等の問題点に基づき、財団は大学、および独立系の研究機関、研究型NGOなどの広範な機関と交渉を重ね、特定の調査方法や研究過程の特定の部分に焦点をあてたワークショップを実施する可能性を探ってきた。そして、昨年度インドネシア若手研究助成で1件の助成を実施したのに引き続き、今年度は新たに研究能力向上プログラムで4件のプロジェクトを助成することが決定した(2003年3月現在)。

本プログラムは、申請希望者と財団との話し合いによって形成されるものであり、公募は行っておらず、財団内部の会議で決定される。また、5年後にはすべてのプロジェクトを総評価する予定である。

◎助成対象一覧

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(ドル)
	カンボジア		
1	D02-RS-04	トヨタ財団ジュニア・フェローシップ・プログラム P.ペイカム　クメール研究センター　センター長	40,500
	インドネシア		
2	D02-RS-01	地元研究者のためのトレーニング イグナス クレデン　東部インドネシア研究所　所長	48,602
3	D02-RS-03	異文化・地域研究のための奨学金プログラム P.M.ラクソノ　ガジャマダ大学アジア太平洋研究所　所長	12,000
	ヴェトナム		
4	D02-RS-02	被写体からの声：モンの目から見た世界 D.B.ハン　ヴェトナム民族学博物館　大学院生	36,000
		合計　4件	**137,102**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト(URL　http://www.toyotafound.or.jp/)をご参照下さい。

Ⅲ-4 「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成

運営および選考について | 石井米雄［選考委員長］

本プログラムは、トヨタ財団の一つの看板プログラムとして内外で高い評価を受けてきているが、20年以上も同じ形で継続してきているため、2001年度より「日本向け」「アジア相互間」ともに評価作業を行っている。その評価の結果は、2002年末には取りまとめられ、2004年をめどにプログラムの大幅な改定を行う予定でいる。まだ議論の途中であるが、その際の方向性としては、東南アジアプログラムの他の二つのプログラムである東南アジア国別助成(SEANRP)および東南アジア研究地域交流プログラム(SEASREP)とより有機的な関連を持たせるような形で運営されるべきではないかと現時点では考えている。そのため、2003年度までに徐々に南アジアに対する助成の優先度を下げ、東南アジア域内における東南アジア研究を支援する形での翻訳出版を奨励するという方向を検討しつつある。今年度はそのような移行期的な状況にあたる。

昨年度より申請用紙の改定を行い、さらに翻訳サンプルの添付を求めたことで、より綿密に翻訳をチェックする体制が整った。そのため、今年度の案件は原著の価値や翻訳出版の意義が認められたとしても、翻訳が必ずしも正確ではないという理由で不採択となったものが多かった。特に固有語などの翻訳に関しては原文との照応や現在のアカデミズム一般における使われ方が問題となり、また、複数名で翻訳を分担して行う場合には文体や用語の統一が不可欠である点が指摘された。さらに、英語のように話者が多い言語と他のアジアの言語からの翻訳では翻訳料に差があるべきではないかという点が指摘され、選考の際に考慮された。

日本向け

本年度は11件の申請があり、選考委員会では当該書の翻訳・出版の意義、翻訳の質、翻訳者・出版社の実績、翻訳作業の進捗状況を考慮に入れて選考を行い、8件が採択された。助成対象は、インド、インドネシア、カンボジア、タイ、ヴェトナムの人文科学書である。以下に採択になった案件を概観してみる。

インドの『渡河』は底辺の人々の生活を描いてきたベンガル文学の代表的な作家ショモレシュ・ボシュの短編集である。スラムで暮らしていた作家の体験からつづられる作風は、力強い人間の生の営みがみずみずしく描かれている。また、『シャドウラインズ』は近年注目を浴びている南アジアの現代史を記憶と語りという視点から再考するという問題意識を反映して書かれた小説であり、文学のみならず社会科学の研究分野でも引用されるほど高く評価された作品である。これは昨年度の助成によって既に出版されたウルワシー・ブターリア著『沈黙の向こう側――インド・パキスタン分離独立と引き裂かれた人々の声』と同様の系譜をたどっており、歴史を新しいレンズで見ることを可能にしてくれる刺激的な著作である。

インドネシアの作品、『マックス・ハーフェラール』は、19世紀半ばに無名のオランダ人植民地官吏が在任中の経験をもとに植民地支配の内情を内部から描いた自伝小説である。本書は1860年に出版されるやいなや世間に大きな反響を巻き起こし、やがて植民地官吏の必携書といわれるようになった。諸外国でも注目され、英語をはじめドイツ語、フランス語、ロシア語、中国語、韓国語等にも翻訳されており、インドネシアだけでなく、広く東南アジアにおける植民地支配を知るための書となるであろう。また、『セノ・グミラ・アジダルマ短編集』は現在のインドネシアにおいてもっとも活動的な作家の1人であるセノ・グミラ・アジダルマの短編を、著者の作風の変化が感じられるようにその作品を選択してまとめたものである。著者は日本で講演活動を行ったこともあり、日本において彼の文学作品への関心が高いことから、インドネシアの現代文学を知るうえでの貴重な1冊となる。

『闇は去った』は日本でもまだほとんど紹介されていない現代カンボジア文学作品の翻訳である。ポルポト時代を生き延びた作家による作品は力強く感動的であり、当

時の時代の息吹を再現している。翻訳者はカンボジア語の翻訳ができる数少ない専門家であり、非常に貴重な試みである。

ヴェトナムの小説、『ツバメ飛ぶ』は、グエン・ティ・ホアンによる1960年代末にダナンの漁村で結成された、要人テロ部隊「ツバメ隊」の少女隊員クイの物語である。1989年にヴェトナム作家協会賞を受賞したこの作品は、敵・味方、善・悪の単純な二元論的構成から離れて、戦争をクリティカルな視点から見直し、戦争がもたらす悲惨を描き出している。『ドイモイの形成――ヴェトナムの新しい経済政策』の著者は、ドイモイ、刷新という言葉の生みの親であり、ヴェトナムの社会主義的計画経済から、市場経済へ移行するという政策の転換期に大きな役割を担った経済学者、グエン・スアン・オアンである。本書はドイモイ政策成立にいたる背景や経緯、その展開と現状及び課題を体系的に分析したものであり、ドイモイ政策の成立を理解する上で貴重な資料を提供する。

タイからは、タイの政治経済史の優れた概説書である、『タイ国――その経済と政治』が英語から日本語へ翻訳されることになった。この本は、研究者向けに書かれた学術書だが、一般読者が読んでも十分に分るように読みやすく書かれている。

アジア相互間

本年度は、インド、インドネシア、ラオス、ミャンマー(ビルマ)、パキスタン、スリランカ、タイ、ヴェトナムから23件の申請があり、そのうち14件が採択となった。内訳は、インド、ラオス、スリランカ、ヴェトナムが各1件ずつ、ミャンマー(ビルマ)とパキスタンが各2件、インドネシアとタイが各3件ずつである。助成の対象となった書籍は、人文社会科学書や文学書等である。

■東南アジア

本年度、インドネシアは3件のプロジェクトを助成することとなった。ヴェトナム人作家のズオン・トゥ・フォン著の*Novel Without a Name*はヴェトナム戦争のゲリラの若い指揮官クアンの物語であり、著者の世代を精神的に引き裂いた葛藤を描いており、インドネシアでヴェトナム文学を紹介するという意味だけではなく、混乱するインドネシア社会において役立つものと期待される。また、*Aparajito*は20世紀ベンガル文学を代表する文学者の一人でもあるビブティブション・ボンドパッタエの作品であり、インドの貧しい少年であるオプーが成長していく過程を描いている。*Laos: Culture and Society*は著名な人類学者のグラント・エバンスが編集したラオスに関する概説書であり、ラオスに関する著作がほとんど存在しないインドネシアにおいてはラオスへの関心が促進されることが期待される。

ラオスは、1997年にアセアンに加盟したばかりであり、隣国の歴史や社会を知るためのラオス語による文献は大変限られている。その中で、東南アジア研究の第一人者たちによって執筆された東南アジア史のいわば教科書である*In Search of Southeast Asia*が翻訳され、研究や教育目的で利用されることは大変意義深い。

ミャンマー(ビルマ)におけるこれまでの助成は、ニーニーミン氏によるチェンマイ年代記をビルマ語から英語へ翻訳するという1件のみであり、しかも、翻訳された言語が東南アジアの言語ではなかったので、例外的な案件であったといえる。今年は、ミャンマー(ビルマ)の二つの出版社、ミャンマー・ブックセンター(MBC)とミャンマー作家・ジャーナリスト協会 (MWJA)に、このプログラムの主旨に沿った案件の申請を働きかけた。この二つの出版社から出された申請書には、ここ数年ミャンマー(ビルマ)における英語力が著しく低下しており、多くのビルマ人は洋書が読めなくなるであろうということ、さらに、人文・社会科学そして東南アジアというような地域に関する出版物は質量ともに不十分であるという2点が指摘された。選考の結果、MBCとMWJAから出された案件がそれぞれ一つ採択された。前者は、東南アジアの短編集の翻訳であり、後者は19世紀に書かれたR.A.カルティニの書簡の翻訳である。この書簡集は、インドネシアの歴史と東南アジアの女性運動を考える上で非常に重要な資料である。ミャンマー(ビルマ)の政治状況と、出版に対する検閲などを考慮して、初年度の助成は翻訳と編集費のみに限定された。出版許可が問題なくおりた場合、助成対象者はその翌年に再び出版のための申請をすることになる。

チェンマイ大学の歴史学者、サラサワディ・オンサクンによる北タイの歴史*Prawattsat Lanna*を英訳するプロジェクトは、今年最終年度の3年目を迎える。この本は現在の北タイ史研究の最良の成果の一つという評価を得ており、これを国外の研究者に広く紹介しようというのがこの翻訳プロジェクトの目的である。2003年には、予定通

り出版の運びとなっている。

タイのコブファイ出版プロジェクトから二つの翻訳が出される。一つは、ラジモハン・ガンディによる、*Revenge and Reconciliation: Understanding South Asia History*の英語からタイ語への翻訳。この本は、インドの新しい歴史の研究ではなく既存の研究成果を使いながらインドにおける紛争の源をこの長い歴史の中から読み取っていこうという試みである。マハーバーラタからイギリスからの独立後までを包含する壮大な構想の本である。もう一つは、韓国の作家、黄順元の14の短編からなる短編集のタイ語への翻訳である。黄順元は1930年代から作家として活動しており、韓国の解放直後の純粋文学を代表する作家といわれる。この短編集は黄順元のこれまでの作品群のなかでも秀逸の作品という評価を受けている。

ヴェトナムからは、近藤守重(正斎)が18世紀に書いた安南紀略をヴェトナム語へ翻訳するプロジェクトが出されている。この本は、当時安南と呼ばれていたヴェトナム中部の歴史、民俗誌であり、ハノイの人文社会科学大学歴史学部の漢書と日本語に堪能な研究者チームによって翻訳される。

■南アジア

本年度、助成が決定したインドからの案件はインド在住のチベット亡命政府の出版部からの申請であり、日本の昔話である「かぐや姫」をチベット語と英語に翻訳し、インド国内のチベット人の学校に配布するというやや例外的な案件である。本件がチベット語に翻訳されるほとんどはじめての日本の民話になるという点が評価され、採択されることとなった。

パキスタンの助成対象者はこれまでにも東南アジアや南アジアの文学作品の翻訳を行ってきているが、本年度はバングラデシュとインドのアッサムの作品の翻訳を行うこととなった。いずれも女性作家による作品であり、南アジアの中でも一様に厳しい状況に置かれている女性の視点から社会を捉えた作品を紹介しようとする意図が感じられ、高く評価された。

スリランカの助成対象者は著名な日本文学研究者であり、これまでにも数多くの日本文学の翻訳を日本語から直接シンハラ語に行っている。今年度は、スリランカでは人気の高い黒沢明作品の脚本の翻訳であり、日本の戦後を描いた同作品が30年近くに及ぶ内戦にようやく停戦協定が締結されたスリランカにおいて共感を持って受け入れられることが期待される。

以上の助成案件が、偏狭なナショナリズムや宗教対立によって引き裂かれそうになるアジア地域に理解と共感をもたらすための大海の一滴となることを願う。

◎助成対象一覧（日本向け）
助成番号下の（継X）は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円) (助成実施期間)
1	D02-B-01 （ヴェトナム）	*Chim En Bay*[原著ヴェトナム語　Nguyen Tri Huan著 Nha Xuat Ban Kim Dong出版社　Hanoi 2000年]の『ツバメ飛ぶ』への翻訳・出版 出版社：てらいんく　翻訳者：加藤 栄	1,200,000
2	D02-B-02 （ヴェトナム）	*The Making of Doi Moi: The New Economic Policy of Vietnam* [原著英語　Nguyen Xuan Oanh著　自家出版Ho Chi Minh City 2000年]の 『ドイモイの形成――ベトナムの新しい経済政策』への翻訳・出版 出版社：明石書店　翻訳者：白石昌也　他	1,280,000
3	D02-B-03 （インド）	*The Shadow Lines*[原著英語　Amitav Ghosh著　Ravi Dayal Publisher出版社 New Delhi 1988年]の『シャドウラインズ――語られなかったインド』への翻訳・出版 出版社：而立書房　翻訳者：井坂理穂	1,630,000
4	D02-B-04 （タイ）	*Thailand-Economy and Politics*[原著英語 Pasuk Phongphaichit and Chris Baker著　Oxford University Press出版社 U.S.A. 1995年]の『タイ国――その経済と政治』への翻訳・出版 出版社：刀水書房　翻訳者：北原 淳　他	2,880,000
5	D02-B-05 （カンボジア）	*Ronoc Phot Hauy*[原著カンボジア語　Pal Vannarirak著 Rongpum Kasaet Phnom Penh出版社　Phnom Penh 1988年]の 『闇は去った』への翻訳・出版 出版社：段々社　翻訳者：岡田知子	1,120,000
6	D02-B-06 （インド）	*Samaresh Basu Galpa Samagra*[原著ベンガル語　Samaresh Basu著 Mausumi Prakashani出版社　Calcutta 1994年]の 『渡河――ショモレシュ・ボシュ短編集』への翻訳・出版 出版社：段々社　翻訳者：内山眞理子	1,120,000
7	D02-B-07 （インドネシア）	*Max Havelaar*[原著オランダ語　Multatuli著　G. A. Van Oorschot出版社 Amsterdam 1950年]の『マックス・ハーフェラール』への翻訳・出版 出版社：めこん　翻訳者：佐藤弘幸	2,460,000
8	D02-B-08 （インドネシア）	*Saksi Mata, Edisi Kedua*[原著インドネシア語　Seno Gumira Ajidarma著 Yayasan Bentang Budaya出版社　Yogyakarta 2002年]の 『セノ・グミラ・アジダルマ短編集』への翻訳・出版 出版社：めこん　翻訳者：柏村彰夫	1,120,000
		小計　8件	**12,810,000**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト(URL　http://www.toyotafound.or.jp/)をご参照下さい。

◎助成対象一覧（アジア相互間）

助成番号下の（継X）は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(ドル) (助成実施期間)
1	D02-K-01	*Kaguyahime: A Japanese Folk Tale*のチベット語と英語への翻訳・出版	1,500
	（インド）	T.ギャルポ　パルジョ出版　会長	
2	D02-K-02	*Novel Without a Name*[原著ヴェトナム語（翻訳底本英語） Duong Thu Huong著　Penguin Books出版社　U.S.A. 1995年]の インドネシア語への翻訳・出版	11,600
	（インドネシア）	D.ロサ・ヘルリアニィ　インドネシアテラ　所長	
3	D02-K-03	*Aparajito: The Unvanquished* [原著ベンガル語（翻訳底本英語）Bibhutibhushan Bandopadhyay著 Harper Collins出版社　India 1999年]のインドネシア語への翻訳・出版	5,500
	（インドネシア）	A.リファイ　ドゥニア・プスタカ・ジャヤ　所長	
4	D02-K-04	*Laos: Culture and Society*[原著英語　Grant Evans編　Silkworm Books出版社 Chiang Mai, Thailand 1999年]のインドネシア語への翻訳・出版	7,600
	（インドネシア）	マルト MD　インドネシア社会経済調査情報研究所出版局 所長	
5	D02-K-05	*In Search of Southeast Asia*[原著英語 David P. Chandler他著 University of Hawaii Press出版社 Honolulu 1985年]のラオス語への翻訳・出版	6,400
	（ラオス）	ダラ K.　情報文化省国立図書館	(2年)
6	D02-K-06	*Old Truths, New Revelations*[翻訳底本英語 K. K. Seet英訳 Times Book International出版社　Singapore 2001年]のビルマ語への翻訳・出版	2,800
	（ミャンマー）	サントコン　ミャンマーブックセンター　常務理事	(2年)
7	D02-K-07	*Letters of a Javanese Princess*[原著オランダ語（翻訳底本英語） Raden Adjeng Kartini著 Norton & Co.出版　U.S.A. 1964年]のミャンマー語への翻訳・出版	2,300
	（ミャンマー）	ミョータント　ミャンマー作家・ジャーナリスト協会　実行委員会メンバー	(2年)
8	D02-K-08	*Warp and Woof*[原著ベンガル語（翻訳底本英語）　Selina Hossain著 Bangla Academy出版社　Dhaka 1999年]のウルドゥー語への翻訳・出版	3,400
	（パキスタン）	F.タウフィク　マシャル財団　マネージャー	
9	D02-K-09	*A Saga of South Kamrup*[原著アッサム語（翻訳底本英語） Sahitya Akademi出版社　1993年]のウルドゥー語への翻訳・出版	4,600
	（パキスタン）	F.タウフィク　マシャル財団　マネージャー	
10	D02-K-10	*Subarashiki Nichiyobi* [原著日本語 黒澤明著 岩波書店 東京 1987年]のシンハラ語への翻訳・出版	6,000
	（スリランカ）	D.A.ラジャカルナ　ペラデニヤ大学シンハラ学部　教授	

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(ドル) (助成実施期間)
11	D02-K-11	*Prawatsart Lanna* (*Lanna History*) [原著タイ語　Saraswadee Ongsakul著 Amarin Publishing 出版社 Bangkok 1966年]の英語への翻訳・出版	7,200
	(タイ)	チトラポン T.　チェンマイ大学人文学部歴史学科　助教授	(3年)
12	D02-K-12	*Revenge and Reconciliation: Understanding South Asian History* [原著英語　Rajmohan Gandhi 著 Penguin Books India社 New Delhi 1999年]のタイ語への翻訳・出版	7,700
	(タイ)	チャイワット S.　コブファイ出版プロジェクト　代表	(2年)
13	D02-K-13	*The Book of Masks*[原著韓国語　(翻訳底本英語)　Hwang Sun-won 著 Readers International社 London 1989年]のタイ語への翻訳・出版	3,100
	(タイ)	チャイワット S.　コブファイ出版プロジェクト　代表	
14	D02-K-14	「安南紀略藁」[原著日本語 近藤正斎 著　国書刊行会　1906年]の ヴェトナム語への翻訳・出版	6,500
	(ヴェトナム)	N.Q.ゴック　ハノイヴェトナム国家人文社会科学大学　歴史学部　学部長	(2年)
		合計　14件	**76,200**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト(URL　http://www.toyotafound.or.jp/)をご参照下さい。

Ⅳ

その他の助成

Ⅳ-0 その他の助成の概要

「計画助成」について

「計画助成」は「長期的な展望にたち、財団独自の調査と企画にもとづき計画的に行う助成」である。その対象としては、以下の3項目を考えている。

(1)現在および将来の財団の助成プログラムを展開するうえで重要と思われるもの。

(2)わが国の民間助成活動を活発化し、その発展を図るうえで重要と考えられるもの。

(3)その他、他財団との共同助成として、あるいは緊急を要するものとして特に民間財団の助成の意義が大きいもの。

また、助成プロジェクトの形態としては、目的に応じてさまざまなものが考えられるが、従来の経験に基づいて概ね次の項目を対象としている。

1)小規模で継続的な研究活動

2)1)の企画・提案に基づく長期計画型の調査・研究

3)一般的な短～中期型の調査・研究および研究的性格をもつ実験的事業

4)国際的集会の開催や、それにともなう参加者の招聘・派遣

5)報告書その他の文献の翻訳・印刷・出版

6)民間非営利団体の基礎固めに必要な事業の運営

なお、一般公募は行わないこととしているが、申請者の資格に制約はない。財団事務局と関係者の話し合いによって必要な時期に計画書を提出してもらう。

審査については、プログラム会議(常務理事、財団スタッフにより毎月開催される会議)で行い、年3回の理事会で決定している。ただし、緊急を要するものについては、会議の審査を経て理事長の決裁で決定、結果を理事会に報告する場合もある。

「成果発表助成」について

「成果発表助成」は「財団の助成による成果を広く社会に発表すること、および成果を次のステップへ向けて展開するための契機とすることを目的とした助成」である。助成の対象となる事項は、以下のとおり。

(1)助成成果の発表を主内容とした出版物の刊行

(2)助成成果の発表あるいは展開を主目的としたシンポジウム等の集会開催

(3)成果報告書の印刷

(4)その他の形式によるもの

(5)上記(1)～(4)項を実施するにあたって必要と認められる補足調査および編集仕上げ業務

なお、プログラムの主旨からも一般公募は行わず、助成対象者についても、過去においてトヨタ財団の助成を受けたものに限定している。

申請は随時受け付けており、上述のプログラム会議において審議、決定の上、理事会に報告をしている。

なお、助成対象の一覧については次頁以下を参照されたい。

Ⅳ-1 計画助成

◎助成対象一覧

助成番号下の(継X)は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円)
1	D02-P-001 (カンボジア)	カンボジアにおける出版に関するクメール研究センター・レイユーム芸術文化研究所共同プロジェクト ジョン・ウィークス　クメール研究センター　副所長	41,855 (ドル)
2	D02-P-002 (継2)	(財)助成財団センター　情報整備プロジェクト 浅村 裕　財団法人　助成財団センター　専務理事	3,000,000
3	D02-P-003 (継4)	「あいち国際女性映画祭2002」の開催 飯島宗一　あいち国際女性映画祭運営委員会　代表委員	2,000,000
4	D02-P-004	『バンテアイ・クデイ寺院廃仏目録』の刊行 石澤良昭　上智大学外国語学部　教授　ほか9名	5,000,000
5	D02-P-005 (韓国)	『朝鮮地理大百科』の刊行 孫 弘子　平和問題研究所　理事・編集室長　ほか8名	5,000,000
6	D02-P-006 (継2) (オーストラリア)	雲南におけるタイ文字文献の調査と保存プロジェクト C.ダニエルス　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　教授　ほか4名	3,800,000
7	D02-P-007 (継2)	日本占領期ミャンマー(ビルマ)(1942—45年)に関する総合的歴史研究 根本 敬　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所　助教授　ほか10名	6,800,000
8	D02-P-008 (オーストリア)	ワークショップ:「ヨーロッパの博物館・美術館に保管されている日本コレクションの歴史と現状」の開催 ヨーゼフ・クライナー　ボン大学日本文化研究所　所長(教授)　ほか6名	7,750,000
9	D02-P-009	日本占領期東ティモールに関する資料・文献・口述調査 後藤乾一　日本占領期東ティモール史料フォーラム　代表	4,160,000

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円)
10	D02-P-010 (継2)	スリランカ:ポスト・コンフリクトの平和意識と参加型調査研究の実践 足羽與志子　一橋大学大学院社会学研究科　教授	2,700,000
11	D02-P-011 (韓国)	韓国援助機関による対北朝鮮支援についての基礎調査 李 愛俐娥　国立民族学博物館地域研究企画交流センター　外来研究員	4,500,000
12	D02-P-012	Kyoto Review of Sountheast Asia 多言語・多文化e-ジャーナルによる東南アジア研究者コミュニティ構築の実験 白石 隆　京都大学東南アジア研究センター　教授	3,000,000
13	D02-P-013 (シンガポール)	第3回アジア研究者国際会議(ICAS3)の開催 アラン K.L.チャン　ICAS3組織委員会　委員長	15,000 (ドル)
		合計　13件	**54,748,191**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト（URL　http://www.toyotafound.or.jp/ ）をご参照下さい。

Ⅳ-2 成果発表助成

◎助成対象一覧
助成番号下の(継X)は継続X回目

	助成番号	題目 代表者　所属	助成金額(円)
1	D02-S-001	家庭内の「女性に対する暴力」防止に関する社会システム開発のための 日本・韓国共同研究(出版) 波田あい子　(財)東京都医学研究機構・東京都精神医学総合研究所　客員研究員	1,600,000
2	D02-S-002	朝鮮における植民地支配と裁判――判例の収集と分析(フォーラム) 笹川紀勝　国際基督教大学教養学部　教授	940,000
3	D02-S-003	町並みの保存再生――日中都市の比較からその方策を探る(シンポジウム) 大西國太郎　京都造形芸術大学芸術学部環境デザイン学科　客員教授	1,200,000
4	D02-S-004 (中国)	中国における少数民族の民族的アイデンティティの動態: 「チベット化」問題に直面する中国・青海省・河南モンゴル族自治県の事例を中心に(出版) シンジルト　一橋大学大学院社会学研究科　外国人研究員	2,000,000
		合計　4件	**5,740,000**

◎上記各案件の概要はトヨタ財団Webサイト(URL http://www.toyotafound.or.jp/)をご参照下さい。

V

事業実績の概要

V-0 事業実績の概要

本年度の助成事業の内訳は、次ページの表に示すとおりである。研究助成A(個人)、B(共同)、特定課題計で85件2億1,689万円、市民社会プロジェクト助成、市民活動助成計で28件5,615万円、東南アジア国別助成は62件8,163万8,572円*、東南アジア研究地域交流プログラム助成は21件2,992万6,088円*、研究能力向上プログラム助成は4件1,583万2,741円*、「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成は日本向けが8件1,281万円、アジア相互間が14件883万8,001円*、計画助成は13件5,474万8,191円*、成果発表助成は4件574万円、以上合計すると助成件数は239件、助成金総額は4億8,257万3,593円である。

その結果、これまで28年間の助成金累計は件数で5,923件、金額で126億6,341万6,231円となった。なお、以上の金額は理事会決定段階のものであり、その後の変更(一部助成金の返納等)は含んでいない。

本年度の会計状況は、以降の三つの表に示すとおりである。

★――金額が1円単位まで細かくなっているのは、海外向け助成金については、為替相場による現地通貨額の変動をできる限り少なくするために、決定金額を米ドルにしたためである。

本年度の財団の主催事業

■特定課題「近代化とくらしの再発見：私たちが見つける地域の歴史」研究グループ交流会

日時：2003年2月8日～9日
場所：山口県萩市

■研究助成「台湾報告会」

日時：2003年3月28日～30日
場所：台湾・台東県

■SEASREP「助成成果報告ワークショップ」

日時：2003年3月29日～30日
場所：マレーシア・バンギ

助成金累計表　　2003（平成15）年3月31日現在

助成種別	1975年度 —1997年度	1998年度	1999年度	2000年度	2001年度	2002年度	累計 （単位：円）
研究助成金	1,518 5,140,410,000	73 200,000,000	78 200,000,000	76 193,640,000	72 185,970,000	85 216,890,000	1,902 6,136,910,000
市民社会プロジェクト助成金・市民活動助成金	237 398,700,000	19 36,300,000	33 45,500,000	32 46,780,000	28 49,200,000	28 56,150,000	377 632,630,000
市民研究コンクール助成金	198 372,600,000	［当プログラムは1994年度にて終了］					198 372,600,000
東南アジア国別助成金	1,060 1,954,418,482	63 55,651,473	64 58,043,674	63 56,989,085	68 64,684,573	62 81,638,572	1,380 2,271,425,859
東南アジア研究地域交流プログラム助成金	84 84,941,916	39 41,318,642	44 40,829,174	26 51,011,914	15 26,509,332	21 29,926,088	229 274,537,066
研究能力向上プログラム助成金（インドネシア若手研究助成金）	484 114,291,294	46 3,571,662	30 3,443,790	41 3,939,751	1 3,202,250	4 15,832,741	606 144,281,488
国際学術研究集会助成金	30 60,263,000	［当プログラムは1980年度にて終了］					30 60,263,000
「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成金　日本向け	205 429,770,000	5 14,350,000	7 14,760,000	9 15,740,000	5 9,580,000	8 12,810,000	239 497,010,000
「隣人をよく知ろう」プログラム翻訳出版促進助成金　アジア相互間	171 440,308,193	19 12,692,263	21 12,288,855	19 12,038,502	17 11,944,811	14 8,838,001	261 498,110,625
東南アジア諸語辞書編纂出版助成金	6 40,000,000						6 40,000,000
東南アジア研究英訳刊行助成金	3 43,042,587	［当プログラムは1989年度にて終了］					3 43,042,587
フェローシップ助成金	10 235,000,000	［当プログラムは1984年度にて終了］					10 235,000,000
計画助成金	188 539,059,240	19 54,958,750	14 30,803,470	12 51,165,000	16 46,450,290	13 54,748,191	262 777,184,941
特別助成金他	7 68,254,000						7 68,254,000
成果発表助成金	372 544,797,240	13 19,125,900	10 17,360,650	9 16,492,875	5 8,650,000	4 5,740,000	413 612,166,665
合計	4,573 10,465,855,952	296 437,968,690	301 423,029,613	287 447,797,127	227 406,191,256	239 482,573,593	5,923 12,663,416,231

注　1——金額は各年度の理事会で決定したものであり、その後の変更については含んでいない。
2——上段は件数を表す。
3——下段は金額（円）を表す。
4——計画助成金は他のプログラムと関連する助成、他の財団との共同助成への参加、緊急な対応を要する助成を示す。
5——特別助成金他は10周年記念特別助成金、日タイ修好100周年特別助成金、その他の助成金を示す。

V-1 2002(平成14)年度会計報告

1. 収支計算書

自2002年4月1日 至2003年3月31日

	項目	金額（円）
収入	財産運用収入	667,651,390
	グローバル500プロジェクト受託収入	9,985,367
	研究助成事業基金取崩収入	150,000,000
	雑収入	42,094,392
	当期収入合計(A)	869,731,149
	前期繰越収支差額	82,550,766
	収入合計(B)	952,281,915
支出	事業費	692,385,422
	特別事業費	1,683,671
	グローバル500プロジェクト特別事業費	10,283,310
	管理費	192,786,472
	特定資産支出	9,212,120
	当期支出合計(C)	906,350,995
	当期収支差額(A)－(C)	▲36,619,846
次期繰越収支差額★ (B)－(C)		45,930,920

★――次期繰越収支差額は、次年度収入予算繰入

2. 貸借対照表

2003年3月31日現在

借方科目	金額(円)	貸方科目	金額(円)
(資産の部)		(負債の部)	
現金・預金	1,017,744,939	未払金	288,980,273
有価証券	28,840,874,870	預り金	3,701,638
前払金	6,414,100	退職給与引当金	82,985,000
仮払金	2,852,058	(正味財産の部)	
未収金	3,711,864	正味財産	29,546,555,972
固定資産	50,625,052	(うち基本金)	(20,000,000,000)
		(うち研究助成事業基金)	(9,450,000,000)
		(うち当期正味財産減少額)	(187,830,364)
合計	**29,922,222,883**	**合計**	**29,922,222,883**

3. 財産推移表

年度末	基本財産(円)	運用財産(円)★	正味財産計(円)
1974(昭和49)年度	3,000,000,000	133,057,559	3,133,057,559
1975(昭和50)年度	3,000,000,000	2,157,688,541	5,157,688,541
1976(昭和51)年度	3,000,000,000	3,186,517,747	6,186,517,747
1977(昭和52)年度	3,000,000,000	5,287,322,930	8,287,322,930
1978(昭和53)年度	3,000,000,000	7,399,047,725	10,399,047,725
1979(昭和54)年度	3,000,000,000	7,861,285,758	10,861,285,758
1980(昭和55)年度	7,000,000,000	4,003,621,400	11,003,621,400
1981(昭和56)年度	7,000,000,000	4,149,064,517	11,149,064,517
1982(昭和57)年度	7,000,000,000	4,287,154,437	11,287,154,437
1983(昭和58)年度	7,000,000,000	4,516,076,037	11,516,076,037
1984(昭和59)年度	7,000,000,000	4,657,945,551	11,657,945,551
1985(昭和60)年度	7,000,000,000	4,790,109,445	11,790,109,445
1986(昭和61)年度	7,000,000,000	4,895,989,935	11,895,989,935
1987(昭和62)年度	7,000,000,000	4,897,677,802	11,897,677,802
1988(昭和63)年度	7,000,000,000	4,638,898,571	11,638,898,571
1989(平成元)年度	7,000,000,000	4,675,999,340	11,675,999,340
1990(平成2)年度	7,000,000,000	4,707,768,117	11,707,768,117
1991(平成3)年度	7,000,000,000	4,705,697,939	11,705,697,939
1992(平成4)年度	7,000,000,000	4,593,449,759	11,593,449,759
1993(平成5)年度	7,000,000,000	4,543,287,609	11,543,287,609
1994(平成6)年度	7,000,000,000	4,492,182,175	11,492,182,175
1995(平成7)年度	7,000,000,000	4,505,449,966	11,505,449,966
1996(平成8)年度	7,000,000,000	9,572,944,480	16,572,944,480
1997(平成9)年度	12,000,000,000	9,641,774,178	21,641,774,178
1998(平成10)年度	17,000,000,000	9,486,314,837	26,486,314,837
1999(平成11)年度	20,000,000,000	11,496,321,907	31,496,321,907
2000(平成12)年度	20,000,000,000	11,259,353,528	31,259,353,528
2001(平成13)年度	20,000,000,000	9,734,386,335	29,734,386,335
2002(平成14)年度	20,000,000,000	9,546,555,972	29,546,555,972

★――運用財産は、研究助成事業基金、固定資産および次期繰越収支差額の合計額

4. 助成金変更及び返納一覧

自2002年4月1日 至2003年3月31日

	助成番号	助成代表者・団体名 助成金種別 事由	助成決定日	上段：決定金額（円） 中段：変更及び返納金（円） 下段：最終助成額（円）
1	98-B2-008	小西砂千夫	1998. 9.22	5,000,000
		研究助成		3,909,171
		助成金残		1,090,829
2	99-B2-118	C.S.スティーブンス	1999. 9.17	4,000,000
		研究助成		176,601
		助成金残		3,823,399
3	D00-B-01	段々社	2000. 9.20	1,530,000
		翻訳出版促進助成日本向け		810,000
		出版編数減		720,000
4	D01-ER-01	M.S.I.ジョクノ	2001. 3.14	2,492,537
		東南アジア研究地域交流プログラム		43,973
		助成金残		2,448,564

V-2 2002(平成14)年度事業日誌

2002年	
4月 1日	研究助成公募開始
4月 5日	トヨタ財団レポートNo.98発行
5月20日	研究助成公募の受付締切[1,138件]
6月19日	第98回理事会 ● 2001(平成13)年度事業報告書、収支計算書の承認 ● 研究助成『特定課題』、助成先決定[8件] ● 市民社会プロジェクト助成、助成先決定[1件] ● RSTP助成、助成先決定[2件] ● 計画助成、助成先決定[1件] ● 評議員の選任 ● 選考委員の選任 第27回評議員会 ● 2002(平成14)年度事業計画、収支予算の報告 ● 理事・監事の選任
7月 1日	第99回理事会 ● 会長の選任 ● 理事長の選任 ● 常務理事の選任
7月15日	Occasional Report No.33(英文)発行
9月18日	第100回理事会 ● 研究助成、助成先決定[77件] ● 市民社会プロジェクト助成、助成先決定[2件] ● 国別助成、助成先決定[58件] ● RSTP助成、助成先決定[1件] ● 翻訳出版促進助成(日本向け)、助成先決定[8件] ● 翻訳出版促進助成(アジア相互間)、助成先決定[14件] ● 計画助成、助成先決定[4件] ● 選考委員の選任 ● 成果発表助成、助成先報告[1件]
10月 1日	市民活動助成公募開始
10月11日	2002(平成14)年度贈呈式
11月20日	市民活動助成公募の受付締切[539件]
12月 2日	2001(平成13)年度年次報告書(英文)発行
12月20日	トヨタ財団レポートNo.99発行
12月25日	2001(平成13)年度年次報告書(和文)発行

2003年	
2月8日—9日	特定課題「近代化とくらしの再発見：私たちが見つける地域の歴史」 研究グループ交流会(山口県萩)
3月24日	第101回理事会 ●市民活動助成、助成先決定[24件] ●市民社会プロジェクト助成、助成先決定[1件] ●2002(平成14)年度変更収支予算の承認 ●国別助成、助成先決定[4件] ●SEASREP助成、助成先決定[20件] ●RSTP助成、助成先決定[1件] ●計画助成、助成先決定[6件] ●2002(平成14)年度収支決算見込の説明・承認 ●2003(平成15)年度事業計画、収支予算の承認 ●30年史編纂体制について ●成果発表助成、助成先報告[3件] ●2003(平成15)年度SEASREP助成、助成先決定[1件] ●2003(平成15)年度RSTP助成、助成先決定[3件] ●2003(平成15)年度計画助成、助成先決定[1件]
3月28日—30日	研究助成「台湾報告会」(台湾・台東県)
3月29日—30日	SEASREP「助成成果報告ワークショップ」(マレーシア・バンギ)

事務局　2003年3月31日現在

常務理事	蟹江宣雄	
事務局長	星野末男	
プログラム部門	久須美雅昭	[シニア・プログラム・オフィサー]
	青木智弘	[プログラム・オフィサー]
	小川玲子	[プログラム・オフィサー]
	田中恭一	[プログラム・オフィサー]
	中村理恵	[プログラム・オフィサー]
	姫本由美子	[プログラム・オフィサー]
	本多史朗	[プログラム・オフィサー]
	渡辺 元	[プログラム・オフィサー]
	川崎恵津子	[アシスタント・プログラム・オフィサー]
	喜田亮子	[アシスタント・プログラム・オフィサー]
	石井恵子	[プログラム・サポーティング・スタッフ]
	田島 文	[プログラム・サポーティング・スタッフ]
	新出洋子	[プログラム・サポーティング・スタッフ]
	土方かほる	[プログラム・サポーティング・スタッフ]
	村井美奈	[プログラム・サポーティング・スタッフ]
	岩本一恵	[プログラム・コンサルタント]
総務部門	星野末男	[部長](兼任)
	成田真澄	[係長]
	川島治彦	[主任]

2002(平成14)年度年次報告

発行者——財団法人トヨタ財団
〒163-0437　東京都新宿区西新宿2-1-1
新宿三井ビル37階・私書箱236
TEL.(03)3344-1701
FAX.(03)3342-6911
発行日——2004年2月27日
デザイン——中垣デザイン事務所
印刷——大日本印刷株式会社

©2004 The Toyota Foundation